

山ノ神遺跡発掘調査報告書

—国道1号京滋バイパス関連遺跡発掘調査報告書第2冊—

1986

滋賀県教育委員会

財團法人 滋賀県文化財保護協会

山ノ神遺跡発掘調査報告書

—国道1号京滋バイパス関連遺跡発掘調査報告書第2冊—

1986

滋賀県教育委員会

財団 法人 滋賀県文化財保護協会

序

埋蔵文化財といわれる遺跡あるいは遺構・遺物は、過去の人類の全ての物的痕跡であり、意識のあるいは無意識のうちに大地に残された歴史資料であります。

多くの場合、これらは土地に埋もれており、逆にそうした状況に置かれていたために、今日まで残されたものであると言えます。

こうした先人の残してくれた国民共有の財産である文化財は、現代を生きる我々が後世に引き継いでいかねばなりませんが、広く県民の方々の文化財に対する御理解と御協力を得なければなりません。

ここに、国道1号京滋バイパスに伴う発掘調査の成果をとりまとめましたので、御高覧のうえ今後の埋蔵文化財の理解に役立てていただければ幸いです。

最後に、調査の円滑な実施に御協力頂きました、地元ならびに関係機関の方々に厚く感謝の意を表します。

昭和61年11月

滋賀県教育委員会

教育長 飯田 志農夫

例　　言

- 本書は一般国道1号（京滋バイパス）建設工事に伴う山ノ神遺跡の発掘調査報告書で、昭和58・59年度に発掘調査し、昭和60年度に整理したものである。
- 本調査は建設省滋賀国道工事事務所からの委託により、滋賀県教育委員会を調査主体とし、(財)滋賀県文化財保護協会を調査機関として実施した。
- 本書で使用した方位は磁針方位に基づき、高さについては東京湾の平均海面を基準としている。
- 本事業の事務局は次のとおりである。

昭和58年度

滋賀県教育委員会

文化財保護課長	外池忠雄
課長補佐	松浦光彦
埋蔵文化財係長	丸山竜平
〃　技術	岡本武憲
管理係主事	小谷　清

(財)滋賀県文化財保護協会

理事長	和田純一
事務局長	江波井太郎
調査課長	林　博通
総務課主事	松木暢弘

昭和59年度

滋賀県教育委員会

文化財保護課長	市原　浩
課長補佐	松浦光彦
埋蔵文化財係長	丸山竜平
〃　技術	岡本武憲

(財)滋賀県文化財保護協会

理事長	南　光雄
事務局長	江波井太郎
調査課長	林　博通
総務課主事	松木暢弘

昭和60年度

滋賀県教育委員会

文化財保護課長	市原　浩
課長補佐	中正輝彦

埋蔵文化財係長 林 博通
〃 技師 用田政晴
管理係主事 山本徳樹
(財)滋賀県文化財保護協会
理事長 南 光雄
事務局長 江波弥太郎
埋蔵文化財課長 近藤 滋
調査二係技師 岡本武憲
総務課長 山下 弘
〃 主事 松本暢弘

昭和61年度

滋賀県教育委員会
文化財保護課長 服部 正
課長補佐 田口字一郎
埋蔵文化財係長 林 博通
〃 主任技師 用田政晴
管理係主任主事 山本徳樹
(財)滋賀県文化財保護協会
理事長 南 光雄
事務局長 中島良一
埋蔵文化財課長 近藤 滋
調査二係技師 岡本武憲
総務課長 山下 弘
〃 主事 西田博之

5. 本書の執筆・編集は、調査担当岡本武憲が行った。
6. 出土遺物や写真・図面については滋賀県教育委員会で保管している。

目 次

序

例言

はじめに	1
I. 位置と環境	1
II. 調査の方法と経過	11
III. 検出遺構	13
丘陵上面部	13
掘立柱建物	13
土廣 3 (SK 3)	13
上廣 4 (SK 4)	13
不定形落ち込み	13
近世屋敷割	14
丘陵南斜面部	15
水田部	20
IV. 出土遺物	21
須恵器	21
当具	26
形代	26
布目瓦	26
近世陶磁器	26
寛永通宝	26
弥生土器	26
石製品(石刀)	26
鉄製品(釘)	26
石鎧	26
フイゴの羽口	26

V. まとめ	27
土器一覧表	33

挿図目次

図1. 山ノ神遺跡位置図.....	2
図2. 遺跡分布図（主に7世紀）.....	3
図3. 若松神社古墳出土遺物.....	4
図4. 横十井遺跡出土陶棺.....	5
図5. 山ノ神遺跡出土陶棺.....	6
図6. 笠山遺跡出土遺物.....	7
源内峠遺跡出土遺物.....	7
笠寺廃寺出土軒瓦.....	7
図7. 東光寺遺跡出土上遺物.....	8
図8. 京滋バイパス路線図.....	8・9
図9. 山ノ神遺跡全体図.....	10・11
図10. 山ノ神遺跡地区割設定図.....	10・11
図11. 丘陵上面北半部遺構平面図（遺物分布図）.....	10・11
図12. 工房跡遺構平面図（SK3・SB1）.....	10・11
図13. 十塙3（SK3）遺物出土状況図.....	12
図14. 十塙4（SK4）実測図.....	13
図15. 近世屋敷割.....	14
図16. 丘陵南斜面トレンチ配置図.....	15
図17. 丘陵上面・南斜面土層断面図.....	16
図18. 丘陵南斜面土層断面図（縦断）.....	17
図19. 丘陵南斜面土層断面図（横断）.....	18
図20. 丘陵裾部遺物出土状況.....	19
図21. 水田部下層遺構.....	20
図22. 遺物実測図(1).....	22
図23. 遺物実測図(2).....	23
図24. 遺物実測図(3).....	24
図25. 遺物実測図(4).....	25
図26. 前期難波宮跡出土須恵器.....	28
図27. 山の神遺跡出土土器組成.....	30

図版目次

- 図版1 山ノ神遺跡周辺
- 図版2 (上) 丘陵南斜面(南から) 調査前
 (下) 丘陵下(丘陵上から) 調査前
- 図版3 (上) 丘陵裾部 試掘状況
 (下) 丘陵南斜面 東半部掘削状況
- 図版4 (上) 丘陵上 近世屋敷剤(北から)
 (下) 丘陵上 近世屋敷剤(西から)
- 図版5 (上) 丘陵裾部 遺物出土状況(丘陵上から)
 (下) 丘陵裾部 遺物出土状況(その一)
- 図版6 (上) 丘陵裾部 遺物出土状況(その二)
 (下) 丘陵裾部 遺物出土状況(その三)
- 図版7 (上) 丘陵南斜面 遺物出土状況(その四)
 (下) 丘陵裾部 遺物出土状況(その五)
- 図版8 (上) 丘陵南斜面 地区割状況(南から)
 (下) 丘陵裾部 土層堆積状況(南から)
- 図版9 (上) 丘陵南斜面 B1～C1(丘陵上から)
 (下) 丘陵南斜面 B1～C1(南から)
- 図版10 (上) 丘陵南斜面 C1～D1 完掘状況
 (南から)
 (下) 丘陵南斜面 A1～C1 光滑状況
 (南から)
- 図版11 (上) 丘陵南斜面 中央 土層堆積状況(西から)
 (下) 丘陵南斜面 Δライン 土層堆積状況
 (西から)
- 図版12 (上) 丘陵南斜面 Dライン 土層堆積状況
 (西から)
 (下) 丘陵南斜面 調査区西端部 上層堆積状況
- 図版13 (上) 丘陵南斜面 Δライン 土層堆積状況
 (東から)
 (下) 丘陵裾部 Cライン 断面状況
- 図版14 (上) 丘陵上 全景(南から)
 (下) 丘陵上 全景(東から)
- 図版15 (上) 丘陵上 部分(東から)
 (下) 丘陵上 北半部(東から)
- 図版16 (上) 丘陵上 80mライン 土層堆積状況
 (北から)
 (下) 丘陵上 Bライン 上層堆積状況(西から)
- 図版17 (上) 丘陵上 遺構 全景(北より)
 (下) 丘陵上 掘立柱建物(SK1)と土壤(SK3)
- 図版18 (上) 土壌(SK3) 遺物出土状況
 (下) 土壌(SK3) 遺物出土状況(部分)
- 図版19 (上) 土壌(SK3) 底部 遺物出土状況
 (北から)
 (下) 土壌(SK3) 底部 遺物出土状況
 (西から)
- 図版20 (上) 当具 出土状況
 (下) 寛永通宝 出土状況
- 図版21 (上) 陶製馬 出土状況
 (下) 石獣 出土状況
- 図版22 (上) 土壌(SK4) 検出状況
 (下) 土壌(SK4) 内 土層堆積状況
- 図版23 (上) 水田部 下層遺構(南から)
 (下) 水田部 下層遺構(北から)
- 図版24 (上) 清内 遺物出土状況
 (下) 清内 遺物出土状況
- 図版25 (上) 水田部 須恵器(8C) 出土状況
 (下) 水田部 弥生土器 出土状況
- 図版26 (上) 石拾遺跡 土層堆積状況
 (下) 石拾遺跡 上層堆積状況
- 図版27 (上) 石拾遺跡 野井戸
 石拾遺跡 土壌
- 図版28 遺物(1)
- 図版29 遺物(2)
- 図版30 遺物(3)
- 図版31 遺物(4)
- 図版32 遺物(5)

はじめに

山ノ神遺跡は、昭和40年度の滋賀県遺跡目録に須恵器窯として登録されている。それ以前にも遺跡に面する谷筋を流れる長沢川の堤防決壊の際に、村の共有財産となっている遺跡の一部が堤防復旧用の土取り場となった時、多量の遺物が出土し、窯体とみられる焼土が確認された。^①また、昭和45年度の『国道1号線 京滋バイパス予定路線内遺跡分布調査概要報告書』(昭和45年度 滋賀県教育委員会)によると、白鳳時代の須恵器窯2基とともに、京滋バイパス路線を含む丘陵上に同時代の集落跡か工房跡と考えられる遺跡が広がっていることが指摘されており、「路線計画に際しては充分配慮し、遺跡を除外して保存に務められたい。」とのコメントが附せられていた。その後、京滋バイパス路線以北に関しては、昭和56年度から昭和59年度にかけて、大津市教育委員会によって調査され、2基の須恵器窯とそれに伴う工房跡が、多量の遺物とともに検出された。以上の分布調査及び大津市教育委員会の調査成果を踏まえて、昭和58年11月より、工事着工に先立って、予定路線内の約5300m²について遺構の範囲確認を行ない、そのうち、窯跡の立地する可能性が高い丘陵南西斜面について本格調査を実施した。昭和59年4月から9月までの6ヶ月間を要して残りの部分について本格調査を実施した他、丘陵西の谷部にも遺物散布があったため、調査範囲を広げ、最終的には7200m²を調査した。その結果、窯そのものの存在は否定されたが、以下のとおり工房跡の一部とともに、多量の遺物を出土しており、7世紀後半の律令国家成立期における生産遺跡の一資料を得ることができた。

本書は、昭和59・60年度に実施した資料整理調査の成果をまとめたものであり、京滋バイパス関連遺跡発掘調査報告書の第2冊である。

I. 位置と環境

山ノ神遺跡の立地する瀬田地区は琵琶湖の湖尻部から流出する瀬田川の左岸域で、南は人戸川河谷、北を瀬岸沖積低地に限られ、標高160～190mの瀬田丘陵とその北麓の広大な段丘地域からなる。段丘は標高115～120mと105mを境として東西に区分され、山ノ神遺跡の立地する一里山周辺は105～118mにあって第Ⅱ面に位置する。^②これらの段丘面は瀬田丘陵に源を発する中小河川によって開析され、ゆるやかな起伏に富んだ景観を呈している。山ノ神遺跡はこれらの段丘のはば中央に位置しており、瀬田丘陵に源を発する長沢川によって開析された細長い段丘の一画を占める。段丘は東西の幅が100～150m、段丘上面と谷底との比高は約10mである。窯は段丘の南西斜面に立地しており、工房は段丘上面に立地する。

山ノ神遺跡が須恵器生産窯として活躍する以前の瀬田地区を中心とした歴史については既刊の報告書等において詳しいので参考されたい。本書では時代別に遺跡名を列記するにとどめたい。

旧石器時代……大池遺跡・大山遺跡・田上山遺跡・瀬田川川底

縄文時代……石山貝塚・螢谷貝塚・栗津湖底遺跡・森派遺跡

弥生時代……太子遺跡・唐橋遺跡・一老坊遺跡

古墳時代……畿部古墳・国分入塚古墳・野柳遺跡・圓山古墳群

律令国家成立以前の瀬田地区の歴史については不明な点が多く、例えば三角錐四神四獸鏡を出土したことで有名な畿部古墳にしても、その築造主体となるべき同時期の集落遺跡の立地はおろか、その推定すらも未定である。

したがって、現時点では、古墳時代までの瀬田地区は生产力の低い、開発の遅れた地域であるとの見解がなされている。

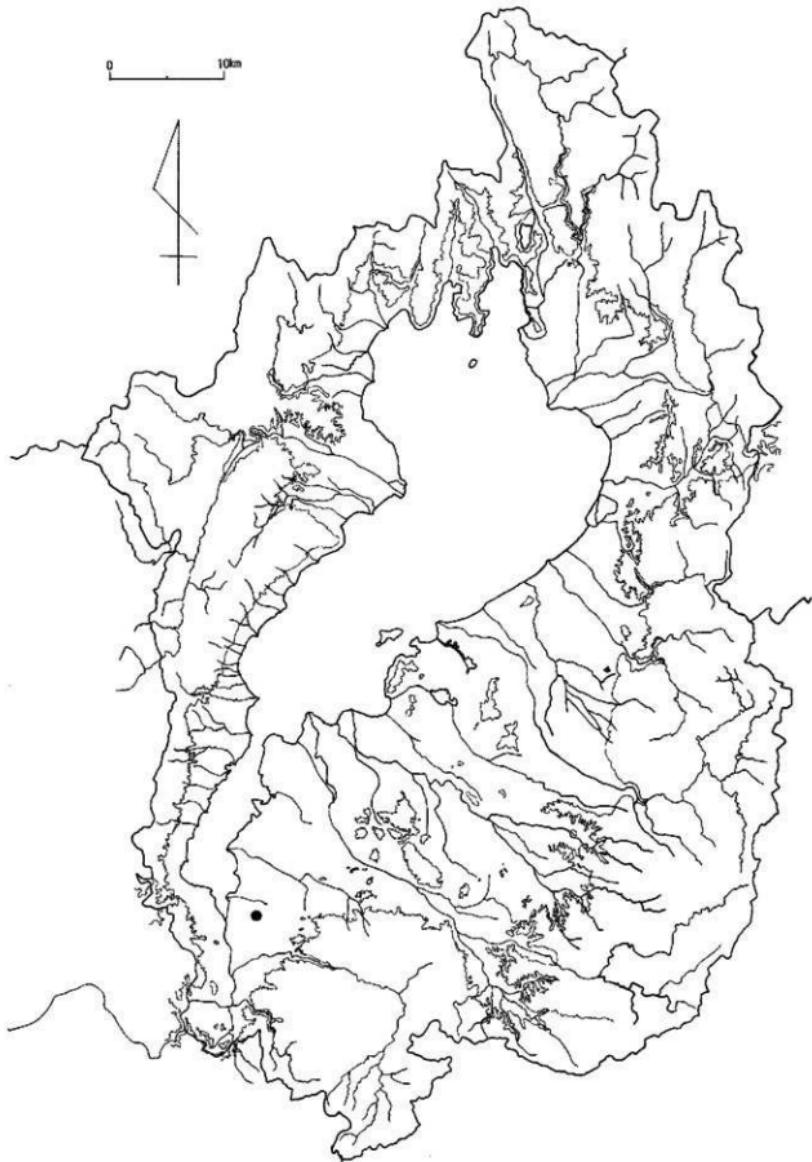


図1 山ノ神遺跡位置図



図2 通路分布図（主に7世紀）

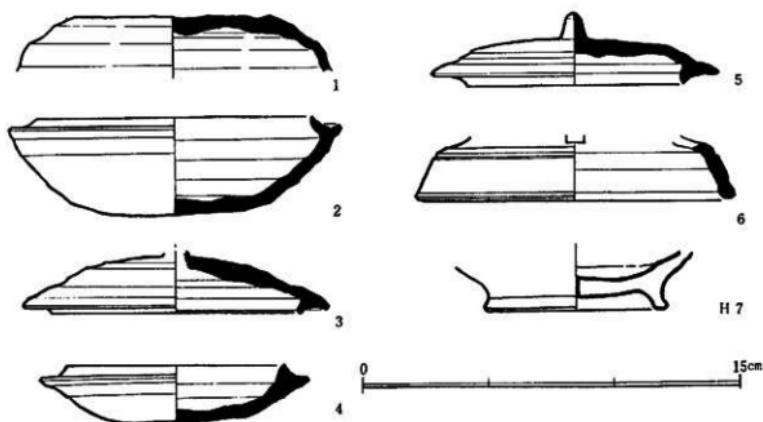
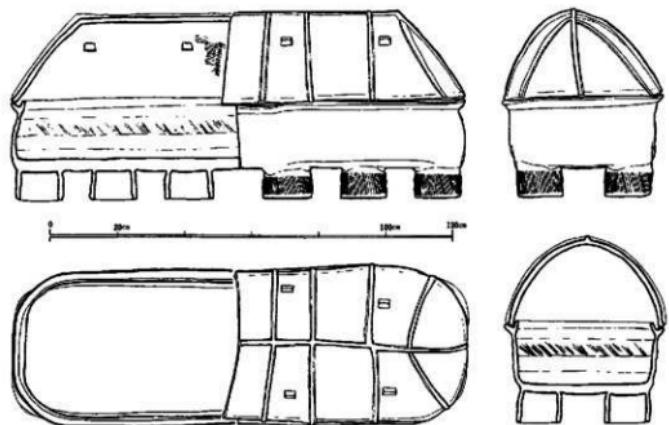


図3 若松神社境内古墳出土遺物実測図

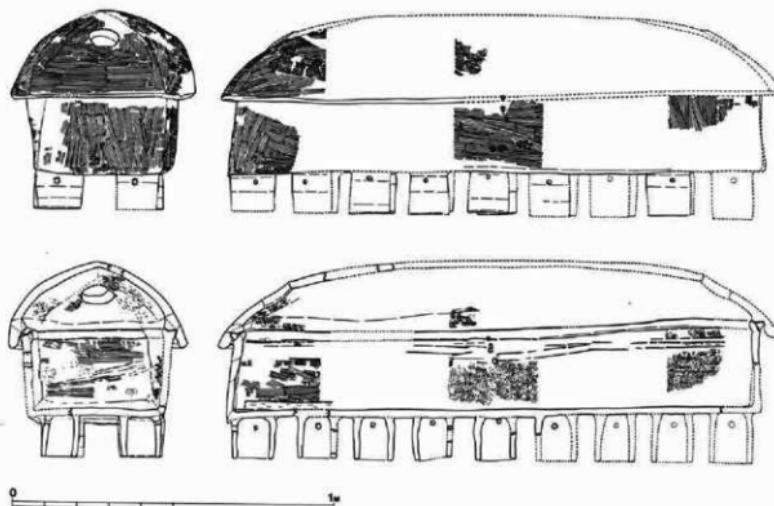


図4 横土井遺跡出土陶棺

ところが7世紀に入ると様相は一変する。丘陵部から段丘縁辺部にかけて若松神社古墳・横土井遺跡S X O 1(方墳)・横尾山古墳群といった、従来の葬法とはやや異なる土師質陶棺や須恵器陶棺を埋葬する古墳が7世紀中葉までに築造されていった。つづいて、本報告の山ノ神遺跡や草津市笠山遺跡に代表される7世紀の第3四半世紀を中心とした須恵器窯が生産を開始する。また、源内岬遺跡や月輪南流遺跡のような製鉄遺跡も操業を行なうなど、瀬田丘陵は製鉄・窯業製品の一大供給地としての機能を果たすことになる。さらには、東光寺遺跡や笠寺廃寺遺跡に見られる寺院の建立など、律令国家の成立と対応するかの如く、瀬田地区は活発な活動を始めるのである。以上、7世紀代の瀬田地区の遺跡群は、その性格の多様性から律令国家形成期の一地域史のモデルケースとして捉え得ると考えている。そこで今までに調査された各遺跡の概略を記してみたい。

^④若松神社古墳：瀬田川の出口を望む段丘縁辺に立地する。墳丘規模は明確ではないが、径約15m、高さ約4m程の円墳であったと想定される。内部主体は両袖の横穴式石室で、復元規模は全長約8.8m、玄室長約2.7m、幅1.8mを推測している。石室内には土師質亀甲形陶棺が安置されていた。県下における土師質陶棺の出土例は神崎郡五個荘町丸山古墳と若松神社古墳の二例のみで、土師氏一族が被葬者として想定されている^⑤。若松神社古墳の築造時期から最終被葬者までの時期は7世紀第1四半世紀とされているが、近年、7世紀の須恵器編年についての再検討がなされており、若干、時期が下ることも考えられる。

^⑥横土井遺跡S X O 1：瀬田丘陵から派生する段丘の先端に近い台地上に位置する。一辺7m程の方墳と考えられ、幅1.5mの周溝が部分的に残存している。周溝内より、7世紀前半と8世紀前半の土師器・須恵器とともに須恵質の四注式陶棺が出土している。報告者は、「瀬田丘陵の古窯址群内、特に笠山遺跡で製作された可能性が強く、またその被葬者についても須恵器生産集団と深く関与していた人間で、集団を統轄していた人間であろう」^⑦としている。古墳の築造時期は7世紀前半と考えられている。

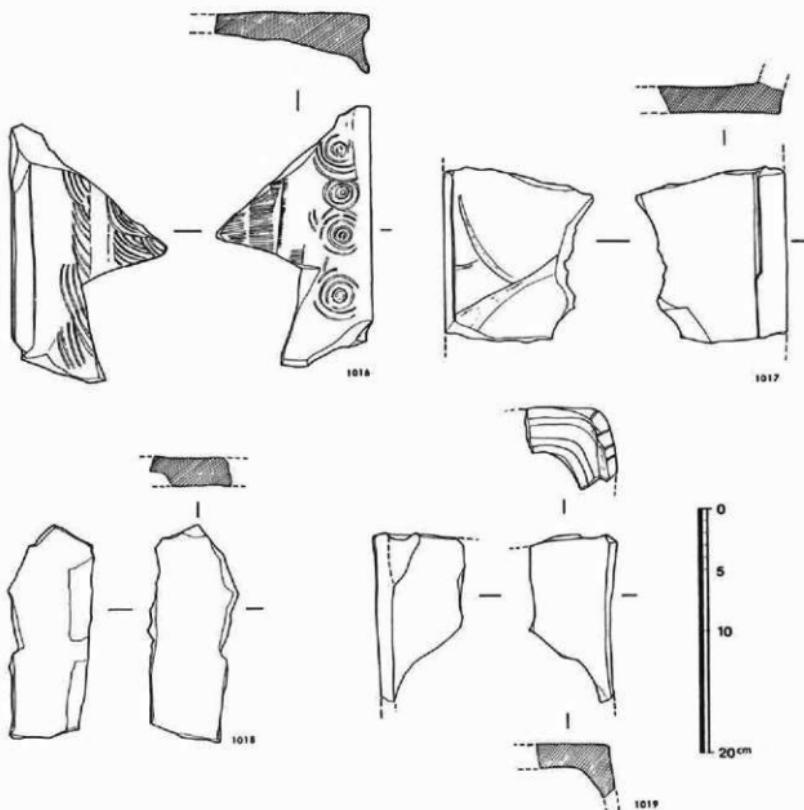
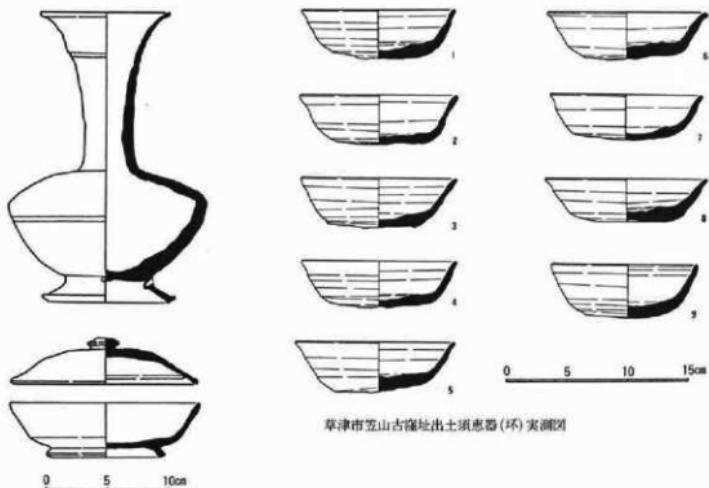


図5 山ノ神遺跡出土陶棺

^⑨ 横尾山古墳群：瀬田丘陵から瀬田川に向って派生した小丘陵の南斜面に、あたかも瀬田川の水運を望むかの如く、丘陵先端部から谷奥へ約120mの範囲に、28基の古墳が築造されている。墳形は方墳と円墳が現在しており、主体部についても、石室をもつもの、木炭構（？）等様々である。また、棺についても、須恵器陶棺、木棺、土師質棺と多様性にとみ、当古墳群の被葬者集団の性格の一端を示している。このうち、瀬田川を望むのに最適所と思われる一角に築かれた1号墳は基底部径で一辺13m前後の方墳で、切石の整美な横穴式石室を主体とする。築造時期は7世紀中葉と考えられている。他の古墳についても1号墳を前後する数十年間と考えられている。

^⑩ 山ノ神遺跡：昭和55年から昭和59年にわたる大津市教育委員会の調査で、須恵器窯2基、掘立柱建物6棟、堅穴住居2棟、土壙37基、溝7条を検出している。これらは、窯とその工房と考えられ、瀬田古窯址群の中でも唯一実態の判明している一群である。（今回報告する調査は、大津市教育委員会の調査区域に隣接している。）このうち、第1号窯は半地下式の登窯で、3次の授業が確認されている。第2号窯は大半が破壊されており、詳細



草津市笠山古跡出土須恵器(环)実測図



図6 笠山遺跡出土遺物
源内跡遺跡出土遺物
笠寺発掘出土軒瓦

は不明である。須恵器は各器種が出土しており、時期的には第2号窯が飛鳥・藤原跡の飛鳥Ⅱ～Ⅳに、第1号窯が飛鳥Ⅲ～Ⅴに比定できるという。その他、この窯で焼かれたと考えられる製品に、陶馬・円面鏡・陶鉢・陶棺がある。このように、多種多様な製品を生産した山ノ神遺跡の工人集団は、周辺の笠山遺跡、茶屋前遺跡、瀬田天神山遺跡、山ノ神南遺跡の各所で活動したと考えられ、大きく瀬田古窯址群として捉えることができる。

笠山遺跡：瀬田丘陵から派生する段丘の南斜面に位置する。東西200～300mの範囲に数基の須恵器窯が存在しているものと考えられている。そのうち、昭和40年、滋賀県教育委員会によって1基の窯が調査され、窯詰の状態で崩落によって放棄された土器群が検出された。時期的には、山ノ神遺跡より若干新しいと考えられる。また、隣接地が京滋バイパス工事のため調査され、7世紀初～前葉の堅穴住居2棟が検出された。

源内跡遺跡：瀬田丘陵の真唯中、標高145mに位置する。1977年度と1985年度に、滋賀県教育委員会により調査され、多量の鉄滓とともに炉壁の一部と考えられる有孔壁が発見された。孔は送風のためと考えられている。出土遺物より7世紀後半～8世紀の操業と考えられている。

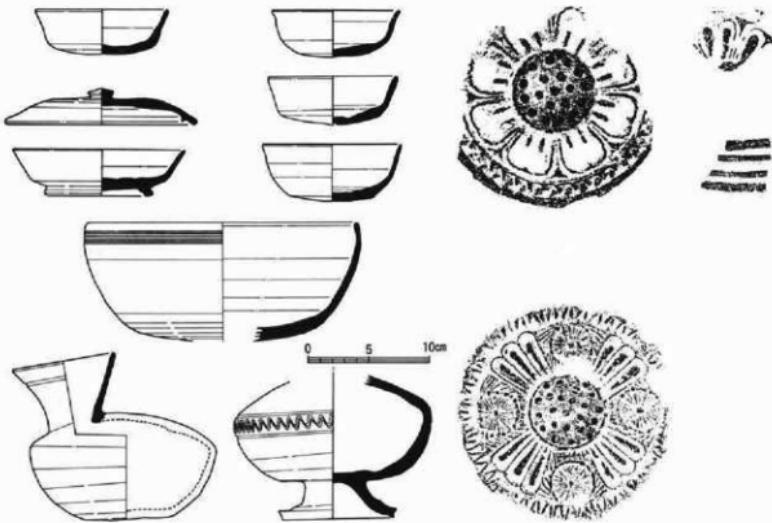


図7 東光寺遺跡出土遺物

月輪南流遺跡^②:須恵器と鉄鋤が採集されており、須恵器窯と製鉄炉の存在が予想される。

東光寺遺跡^③:瀬田丘陵から派生する段丘が湖岸平野に変わる段丘先端部に方五丁四方の方格地割が存在し、しかもその主軸は近江国府と一致する。そのため、大萱=大衙屋の地名と相まって前期近江国衙とする説もある。また、東光寺遺跡は、白鳳時代の古瓦を出土することでも知られている。その瓦は、いわゆる法隆寺式とされる複弁八葉の軒丸瓦と、草津市宝光寺遺跡と東光寺遺跡にしか見られない特殊な文様の軒丸瓦、四重弧の連弧文軒平瓦などがある。昭和58年、寺院の立地する段丘の南側谷底を調査した際、7世紀後半から8世紀前半にかけての多量の遺物が出土した。遺物には、土師器、須恵器をはじめ、瓦、海獸葡萄鏡、鉄鋤、フイゴの羽口、鉄製品、木製品などの他、7世紀後半の墨書き土器、転用鏡、円面鏡などが出土している。とくに、鉄鋤やフイゴの羽口の出土は鉄製品が当遺跡で製作されたことを証明しており、背後の瀬田丘陵に散在する源内岬遺跡や月輪南流遺跡等の製鉄遺跡との関連が注目される。

笠寺庵寺^④:瀬田丘陵から派生する段丘の先端部に立地する。方2町と想定される方格地割が寺域と考えられ、昭和54年度の調査で瓦溜りを検出している。

以上、瀬田丘陵を中心とした7世紀代の遺跡を概観したとおり、瀬田丘陵が一大生産遺跡群として開発されたのは7世紀中葉以降である。これら生産遺跡群出現の背景には、当然ながらその生産物（鉄・須恵器等）を消費する場がある。いいかえれば大規模な需要があってはじめて供給地=生産遺跡群が出現したと考えるのが自然であろう。それが、いわゆる「大津京」遷都や周辺寺院の建立と密接な関係にあるかどうかは疎遠できないが、無関係でないことは確実であろう。



図8 京滋バイパス路線図

- ①滋賀県教育委員会『滋賀県遺跡日録』昭和40年
- ②大津市教育委員会『大津市埋蔵文化財調査報告書(9) 山ノ神遺跡発掘調査報告書』昭和60年3月
- ③滋賀県教育委員会・草津市教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会『横土井(観音寺)遺跡発掘調査報告書—国道1号京滋バイパス開通遺跡発掘調査報告書第1冊—』1985.3
- ④滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会『瀬田川流域工事に伴う流域分布調査 瀬田川』1983.1
- ⑤⑥と同じ／滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会『史跡 近江国衙跡調査概要』1987／大津市役所『新修大津市史1古代』昭和53年
- ⑥梅原末治「東太、野洲両郡に於ける二三の古式墳墓の調査報告(二完結)(近江国に於ける主要古墳の調査 第二回)『考古学雑誌』第十二卷第三号 大正10年11月
- ⑦⑧と同じ
- ⑧滋賀県教育委員会『大津市瀬田若松神社境内古墳調査報告』『昭和四十九年度滋賀県文化財調査年報』昭和61年3月
- ⑨江南岸・丸山古墳群『東海道幹線増設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』昭和40年
- ⑩丸山竜平「土師氏の基礎的研究—土師質陶棺の被葬者をめぐって—」『日本史論叢2』昭和48年
- ⑪白石大一郎『畿内における古墳の終末』『国立歴史民俗博物館研究報告』第1集 昭和57年6月
- ⑫⑬と同じ
- ⑭⑮同じ
- ⑯瀬田橋本自沿連絡協議会・瀬田史跡会・皇子山を守る会・滋賀文化遺産を守る会『横尾山古墳群講演会・現地見学会資料』1985年3月21日／造酒堂「横尾山古墳群の概要」「滋賀文化財だより』No.110 1986.
- 4.2
- ⑰⑱と同じ
- ⑲奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査報告』(奈良国立文化財研究所学報第31冊)昭和53年
- ⑳丸山竜平「滋賀の古墳群」「日本やきもの集成 近畿」1981
- ㉑丸山竜平「律令制期の草津2村落と生産」『草津市史第1巻』昭和56年／草津市教育委員会『草津市文化財調査報告書8 市内遺跡分布調査報告書』1984年
- ㉒滋賀県埋蔵文化財センター「笠山南遺跡の調査(草津市)」「滋賀埋文ニース』第58号 1985.1.31
- ㉓丸山竜平・喜多貞裕「滋賀県下における製鉄遺跡の諸問題」『考古学雑誌』第72卷第2号 昭和61年11月
- ㉔滋賀県教育委員会『国道1号線 京滋バイパス予定路線内遺跡分布調査概要報告書』昭和45年度
- ㉕滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会『大津市 東光寺遺跡発掘調査現地説明会資料』1983.8.7／岡本武憲「大津市大萱 東光寺遺跡」「滋賀文化財だより』No.84 1984.3.31／丸山竜平「近江国衙」「講座考古地理学2 古代都市」昭和58年
- ㉖丸山竜平・田中日佐大「律令制期の草津3白鳳麻寺」「草津市史第1巻」昭和56年／藤居筋・草津の古代寺院」「滋賀史学会誌』第5号 1986.6／『草津市文化財調査報告書8』(前掲㉔)
- ㉗㉘と同じ

II. 調査の方法と経過

今回の発掘調査は、調査地全域を対象とする試掘調査を先ず実施し、そこでの遺構、遺物の検出状況に応じて本格調査を実施する区域を確定した。

調査を実施するにあたって、京滋バイパス工事のセンター杭を基準線として10m区画の地区割を行ない、路線センターをBラインとして前後をA、Cとした。そして、丘陵南斜面裾部から北（草津方面）に向って0から始まる数字を付し、10m区画の南北角の杭（cf.A1）をその区画名とした。

調査地の現況は竹及び雑木林であったため調査着手前に建設省滋賀工事事務所によって伐採して頂いた。

調査は、まず、調査地全域の1/100、等高線は25m間隔の地形測量図を作成した。それと平行して、調査地に任意の試掘トレンチを設定した。

試掘調査は、工房跡の検出が予想される丘陵上面に約10m×2mのトレンチ8本、窓跡の存在が予想される丘陵南斜面の裾部に1本を設定した。その結果、すべてのトレンチから7世紀後半に属する須恵器が出土した他、調査地を東西に横断する小径に近い2本のトレンチから遺構と考えられる落ち込みを検出した。丘陵南斜面においても、完形品を含む多数の遺物が出土した。以上の試掘結果から、調査地全域の本格調査を実施した。さらに、丘陵南側の水田からも遺物が出土していることから、調査区域を拡大した。遺構検出は表土層を重機によって除去し、以下は人力によって掘り下げた。

以上の経過から、すべての現地調査が終了したのは昭和59年10月20日のことで、調査の総面積は約7200m²に達する。

調査日誌（抄）

昭和58年11月11日～11月13日

調査員、作業員と現地にて打合せ。プレハブ棟上。器材搬入。

11月14日

試掘トレンチ設定し、掘り下げ開始。しかし、雑木林の根の除去に手間取る。

11月15日

本日より重機を使用。地区割のクイ打ち開始。

11月16日～11月21日

主に丘陵上面に試掘トレンチ8本を設定し、各トレンチを掘り下げて精査する。遺構面は北のトレンチほど深いところにある。

11月22日

本日より、丘陵南斜面の地形測量を開始する。

11月23日～12月26日

丘陵上面のトレンチ精査とともに、丘陵南斜面にトレンチ設定。完形品数点が出土。

12月27日～12月28日

丘陵上面の2ラインから5ラインまで、重機による表土除去。方形区画の溝を検出。

昭和59年1月5日

丘陵南斜面より焼土および炭の小片を検出。調査員一同、色めき立つ。

1月6日～1月8日

丘陵上面とともに、丘陵南斜面の掘り下げをつづける。

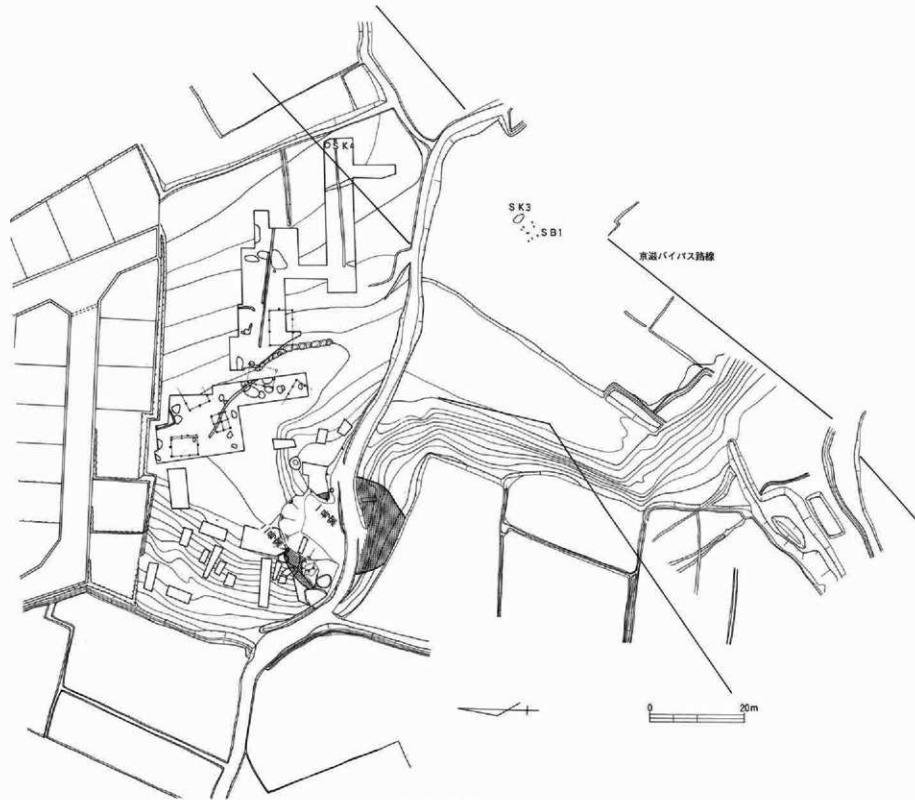


図9 山ノ神道路全体図

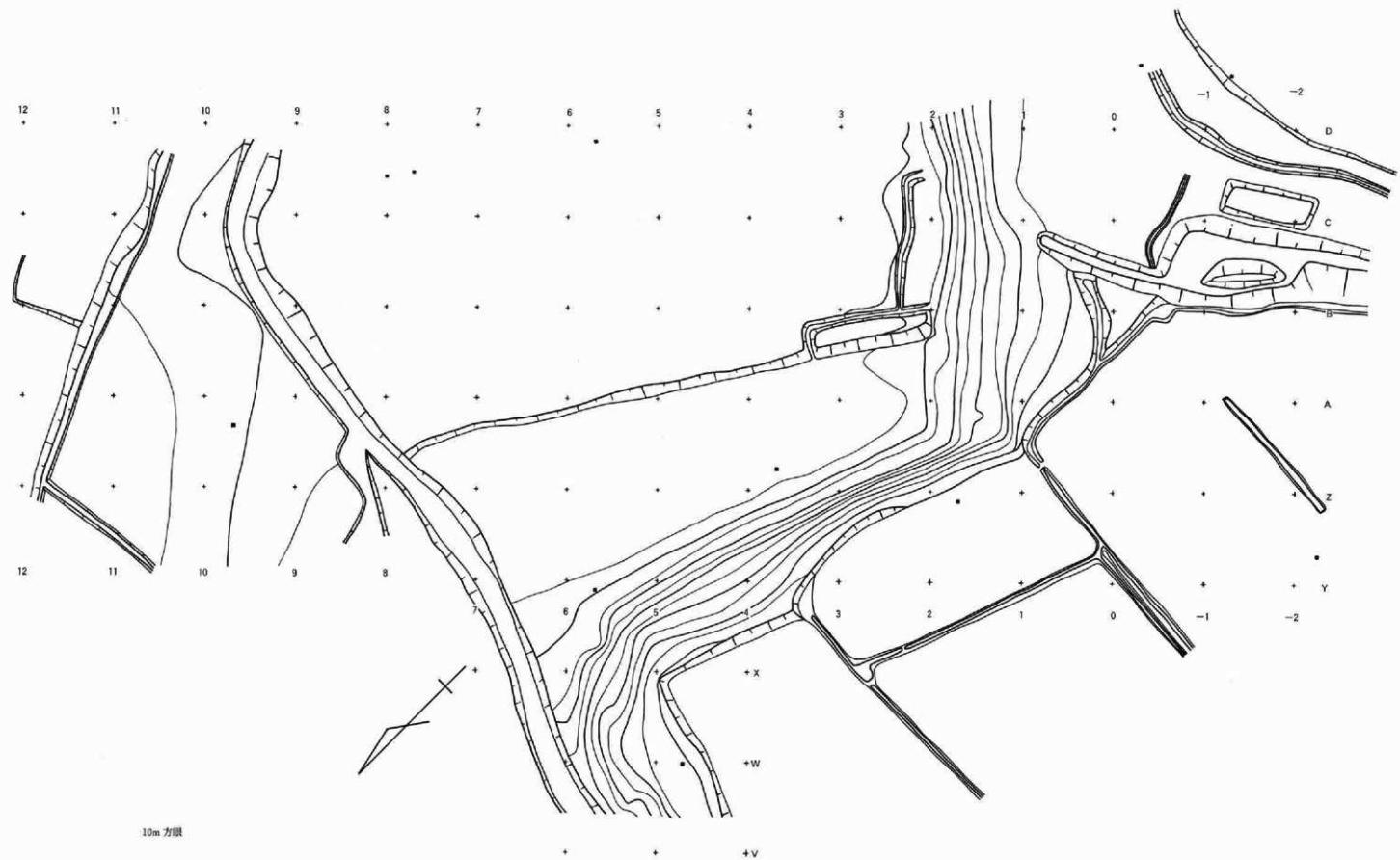
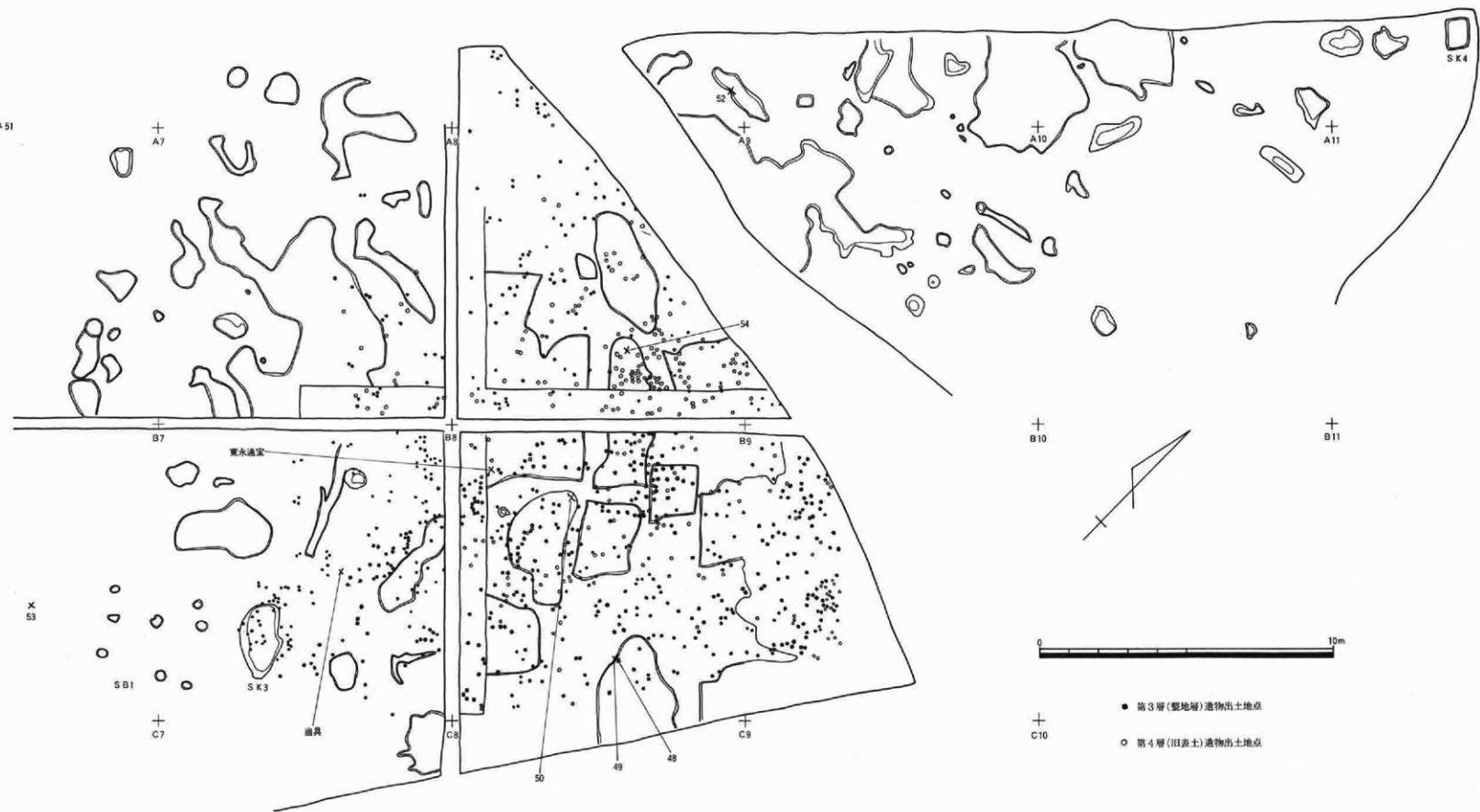


图10 山ノ神遺跡地区割設定図



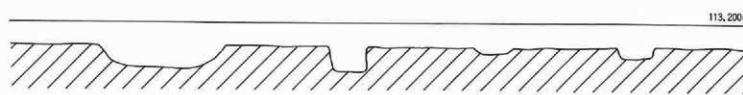
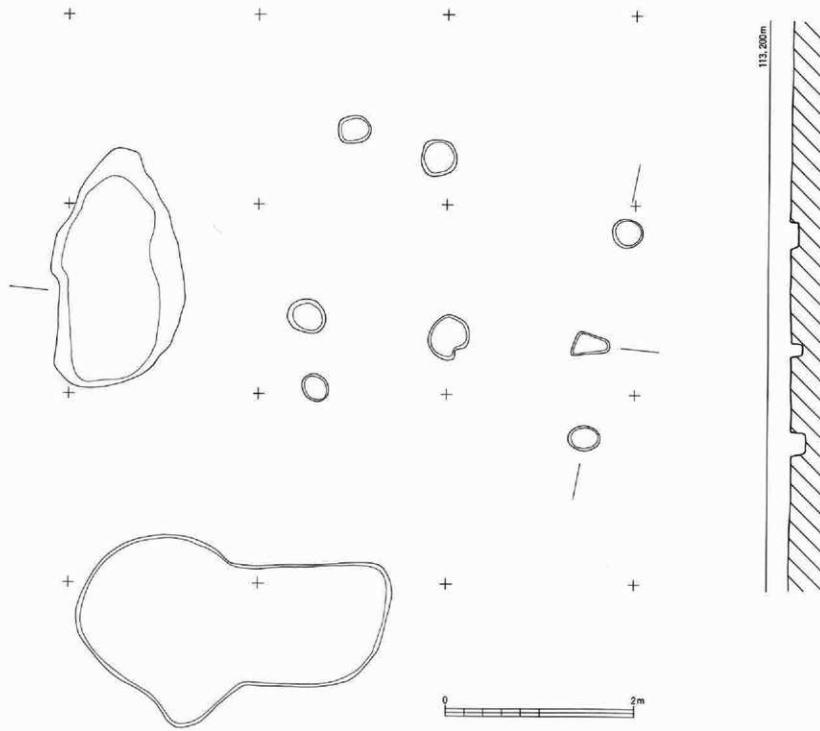


图12 工房跨造桥平面图 (SK 3, SB 1)

1月9日

丘陵上面の方形区画遺構の写真撮影。

1月10日～1月28日

丘陵南斜面のA1区、B1区に全力集中。試掘トレンチで完品の出土した地点を中心に完形品を含む多数の遺物出土。しかし、肝心の窯は存在しないことが判明した。

1月30日～2月1日

30cmを超える降雪のため、野外作業中止。

2月2日～2月6日

1月29日以来の雪が消えず、除雪しながら調査継続。

2月7日～2月16日

丘陵斜面の土層断面図、平面図作成。

2月17日～2月18日

再び降雪のため現地調査中止。

2月20日～2月29日

丘陵南斜面C～D区の掘り下げ。地山近くで近世陶磁検出。大規模な整地の時期が判明した。

3月1日～3月17日

丘陵南斜面A区以北の掘り下げ。

3月18日～3月25日

丘陵南斜面の地山断割を行ない、窯の有無の最終確認を行なう。土層断面図作成。

4月17日～4月21日

丘陵上面の6区以北を重機により掘り下げ。順次、人力による包含層の掘り下げ、遺構検出を行なう。

4月23日～5月12日

丘陵南側水田部分の調査。水田床上下（第3層）より、弥生土器と8世紀の須恵器出土。

5月14日～6月20日

丘陵上面の6区以北の遺構検出。焼土、ビットを検出する。また、各所で石器が出土。遺物分布図を作成する。

6月21日～7月20日

丘陵上面の6区以北の掘り下げ。北へ傾斜する地形どおり、包含層は北へいくほど厚くなる。遺物の出土多く、SK3、SB1を検出する。

7月21日～8月10日

SK3掘り下げ。完品多數を含む土器層であった。遺物出土状況作成。

8月11日～9月1日

丘陵上面の落ち込みを掘り下げる。落ち込み内より石器出土。

9月2日～9月30日

丘陵上面の東西小径以北の掘り下げ。SK4を検出する。火葬墓か？。

10月1日～10月20日

断面図等、一部図面の修正を行ない、現地調査を終了する。

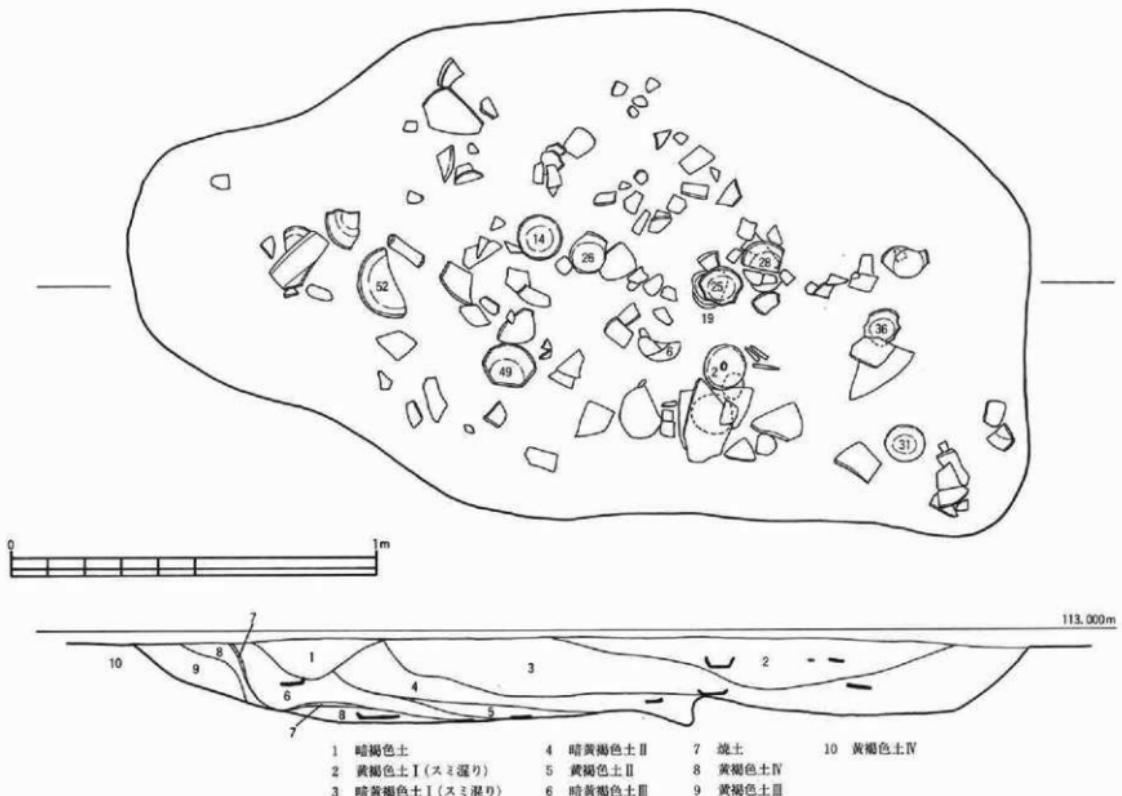


図13 土壌3(SK3)遺物出土状況図

Ⅲ. 検出遺構

今回の調査において検出した遺構は、掘立柱建物1棟、土壙2基、不定形落ち込み多数、近世屋敷跡、丘陵南斜面整地、水田部ト畠溝跡がある。以下、丘陵上面部、丘陵南斜面部、水田部にわけて、その概略を記したい。

丘陵上面部〔図11～15〕

掘立柱建物（SB1）〔図12〕8個の柱穴からなる粗略な建物で、柱穴間隔、柱並びに規則性はみられない。柱穴掘方の径は35～30cmのものが多く、深さも10数cmまでと浅い。建物の規模は、3m×2.4m程度である。隣接して7世紀後半期の遺物を多量に含む土壙（SK3）があり、柱穴からも若千の須恵器片を出土していることから、窯跡に付随する作業小屋＝工房と判断した。

土壙3（SK3）〔図13〕SB1に隣接して検出した不整梢円形の土壙で、長径247cm、短径138cm、深さ22cmを計る。土壙内からは、完品を含む須恵器片153点をはじめ 鉄製品1点、フイゴの羽口片1点を出土した。土壙内東辺部には焼上層が見られ、また、埋土中に炭を含むことから、土壙内で火の使用があったことは確実である。しかし、遺物の中で2次焼成を受けているものはない。土壙埋土は9層からなり、それぞれに須恵器片を含んでいる。とくに、第7層の焼上以上の埋土内遺物は、層位が異なっても接合できるものがあり、比較的短期間で埋没したことがうかがえる。類例として、大津市教育委員会の調査による『山の神遺跡発掘調査報告書』のSK-22 SK-23で、土壙壁面と底部に火を受けた痕跡が認められている。これらの遺構については小鍋治炉等の鉄製品の生産に関係していることが予想される。

土壙4（SK4）〔図14〕調査区の北端で検出したほぼ隅丸方形の焼土壙である。長辺は約1.1m、短辺約0.8m、深さ約0.2mを計る。土壙の壁面は全面が赤く焼けしており、底部には多量の炭が堆積していた。土壙内にはほとんど遺物を含まず、わずかに、須恵器の甕胴部の破片が1点のみ出土した。大津市教育委員会の調査によるSK-27と同一である。

不定形落ち込み〔図11〕調査地北半部において検出された意味不明の落ち込みである。調査区北半部の基本土層は、1表土、2黄灰色土（整地による再堆積層）、3暗茶褐色土（旧表土）、4黄褐色土（地山）である。この

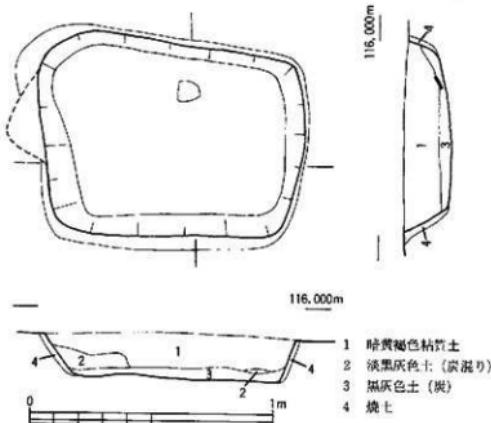


図14 土壙4（SK4）実測図

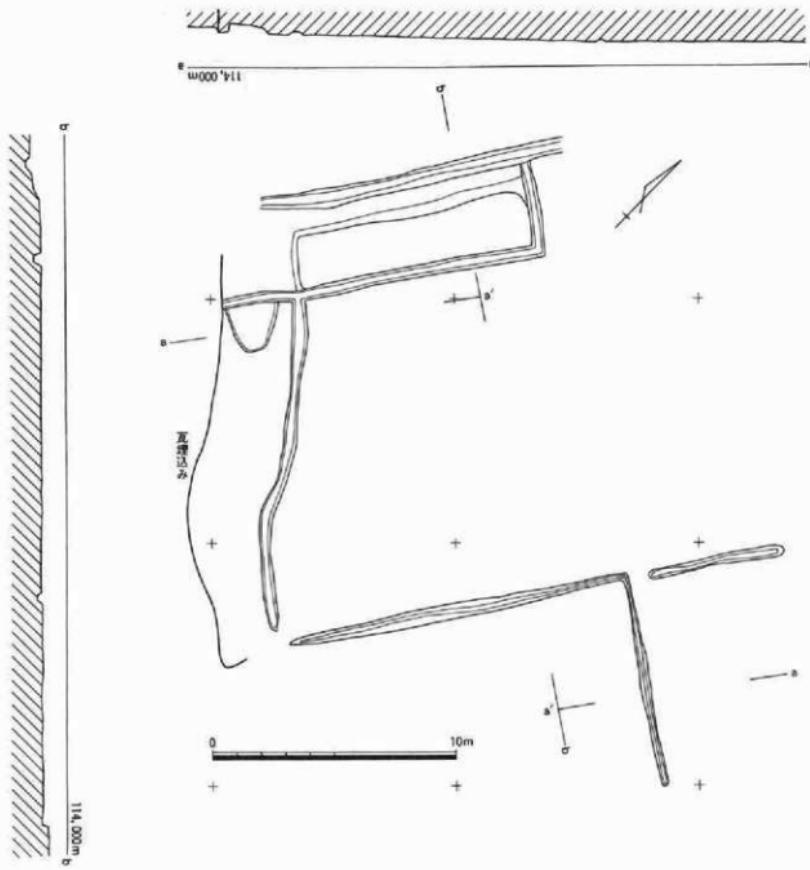


図15 近世屋敷割

うち、1から3までに遺物を包含する。とくに2の整地層から多くの遺物を出土している。しかし、3の旧表土直上において寛永通宝を検出しており、整地時期が近世以降であることが知られる。不定形落ち込みは、旧表土直下において検出されたが、その形状、埋土ともに不鮮明で、人為的な遺構とは考えがたい。落ち込み埋土には遺物をほとんど含まず、わずかに石鎚2点を出土したのみであった。以上のことから、この不定形落ち込みは7世紀後半期以前の樹木根の痕跡ではないかと思われる。なお、石鎚を出土したことから、下層に縄文時代の遺構が存在することが予想されたため、一部を掘り下げたが、遺物とともに全く存在しなかった。

近世屋敷割(図15)現地形より南溝と西溝は確認できた。調査の結果、北面を除く3方向に排水用と考えられる幅40cm、深さ20cmの溝による方形区画を検出した。さらに、丘陵上面の縁端部に瓦の埋込みが18mにかけてみられた。瓦の埋込みは平瓦を縦に3枚重ねてあり、土留め用と考えられる。方形区画の一辺は約14mである。同

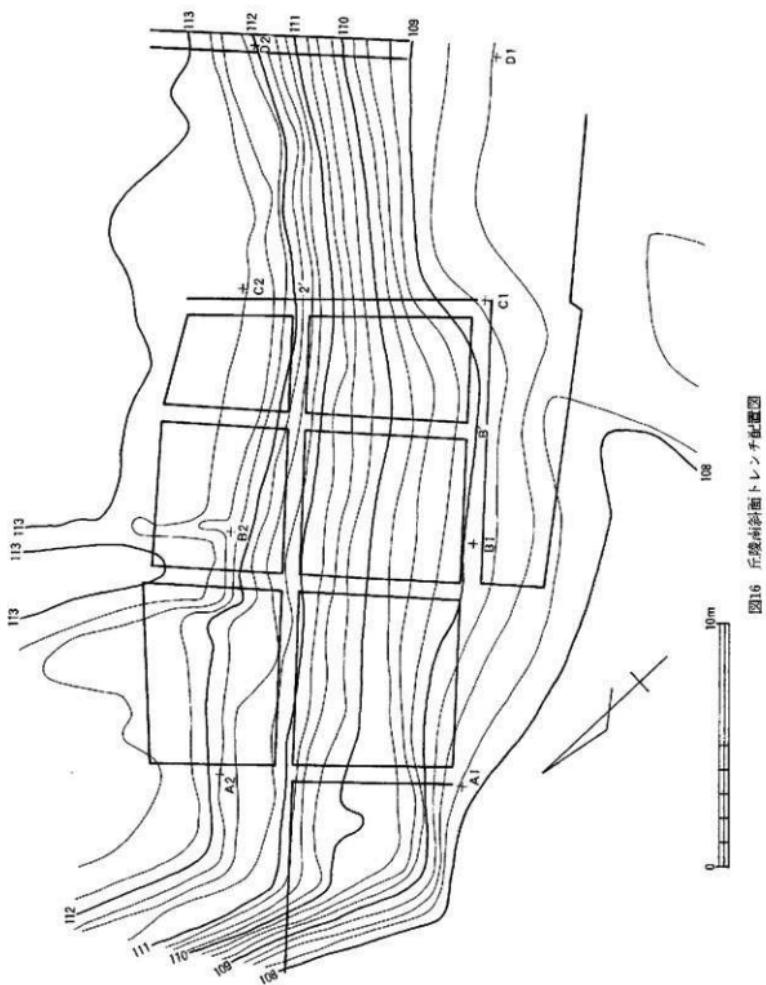


図16 斜坡斜面トレンチ位置図

時期の遺物として染付陶磁類や、寛永通宝がある。

丘陵南斜面部〔図16・17・18・19・20〕

竹林や雜木材伐採後の地表面観察を行なったところ、多數の須恵器片を採集したため、窯跡を含む何等かの遺構が存在すると判断して 上層観察用のアゼを残して全掘した。その結果、調査地区内の丘陵斜面は 0.6~3 m にも及ぶ再堆積層に覆われていることが判明した。この再堆積層は人為的に形成されたもので、土層堆積状況が

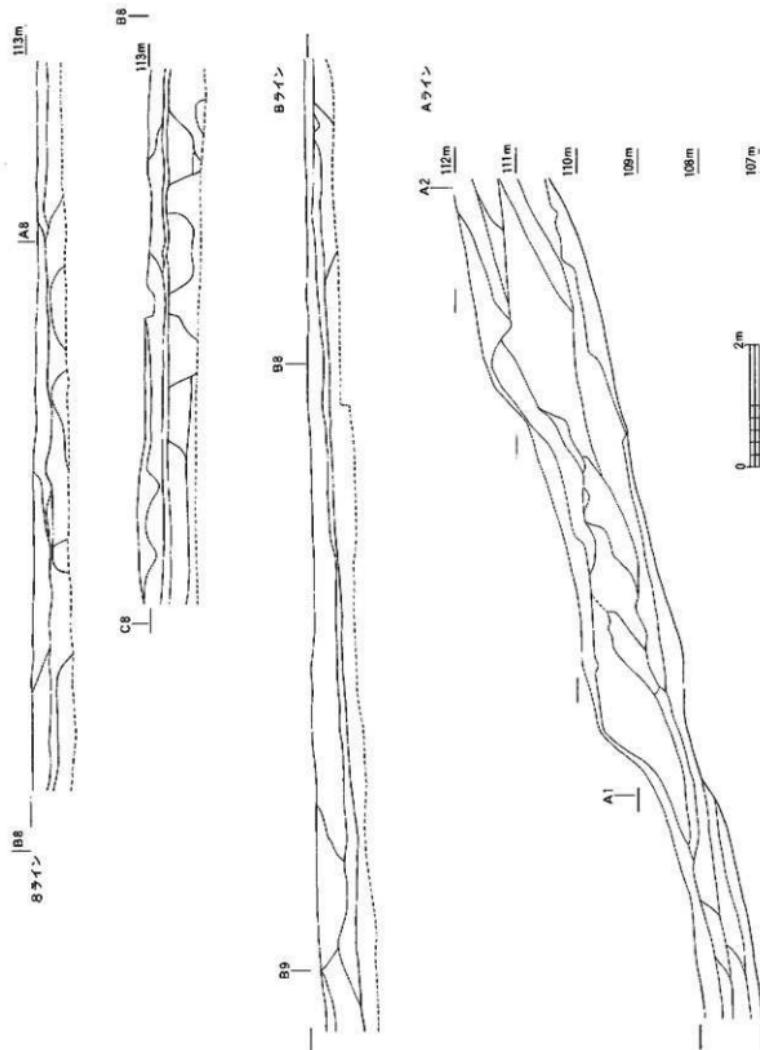


図17 正斜面上・南斜面上層断面図

ら、少なくとも2回以上にわたって形成されていることがわかる。その時期は、丘陵上面で出土した染付陶器と同種の焼が、再堆積層の最下層から出土した〔図18の72〕ことから、丘陵上面の宅地跡と考えられる方形区画

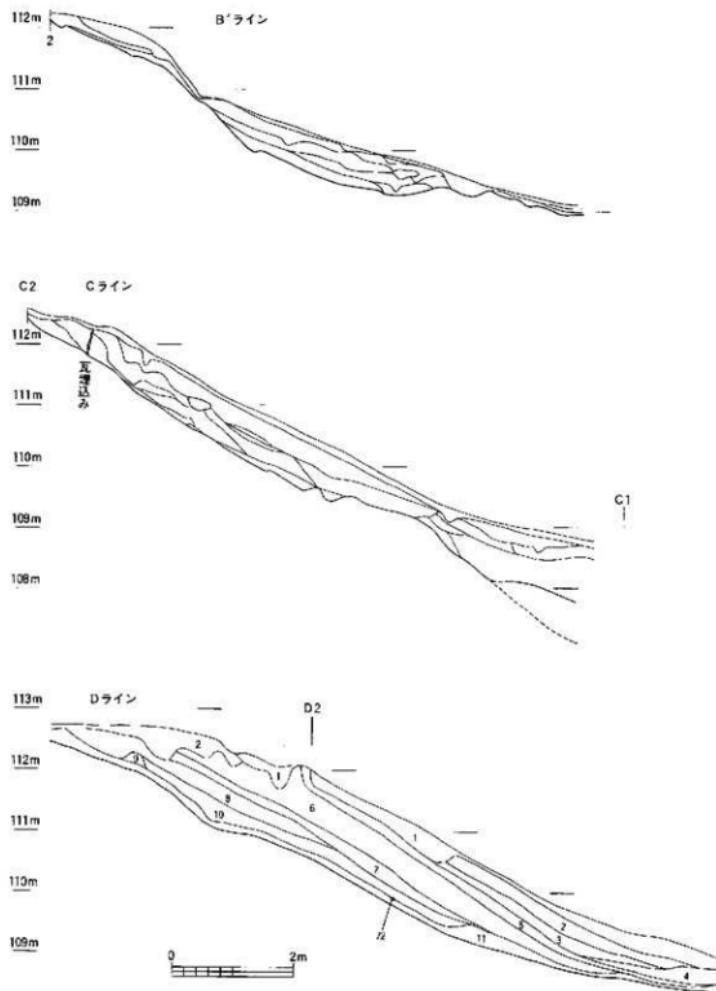


図18 丘陵南斜面土層断面図（縦断）

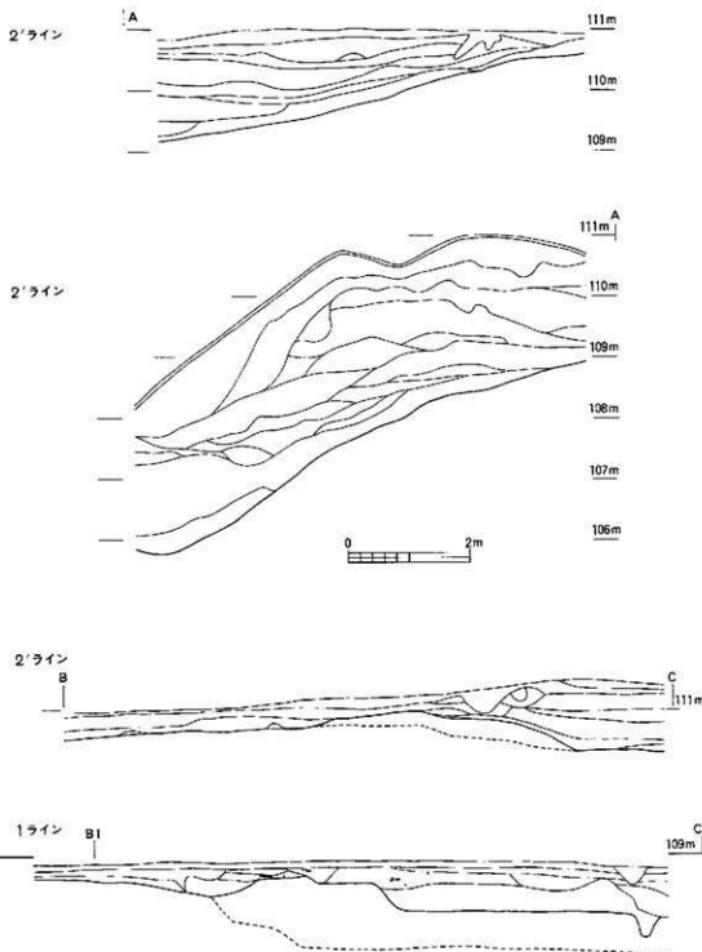
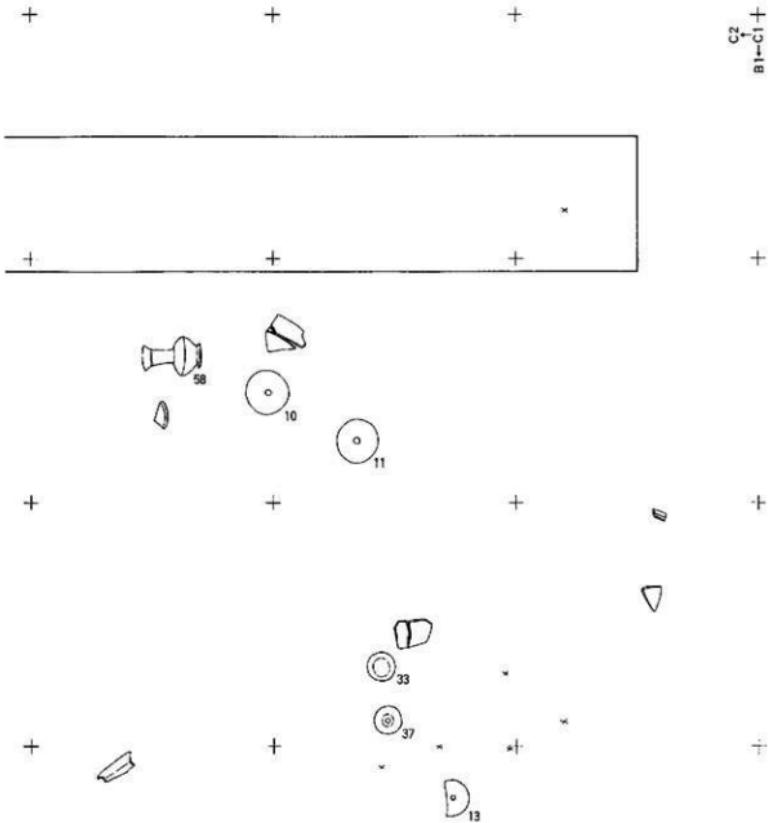


図19 丘陵南斜面七層断面図(横断)

と同時期であろう。これら丘陵裾部及び斜面の再堆積層中からは、7世紀後半期の須恵器完形品数点をはじめとする遺物が多数含まれていた。[図20] 他に、須恵質の形代 [図25の56]、土師器片などが出土している。遺物の総数はコントナ20箇を数える。これらの遺物は本来、丘陵上面に存在したであろう遺構に付随したもので、近世の整地・造成工事により、再堆積層中に混入したものと考えられる。また、丘陵斜面の旧地表面には斜面を横断して浅い溝状遺構と土壌が検出されたが、伴出遺物もほとんどなく、性格は不明である。



109,000m



图20 丘陵底部遺物出土状况

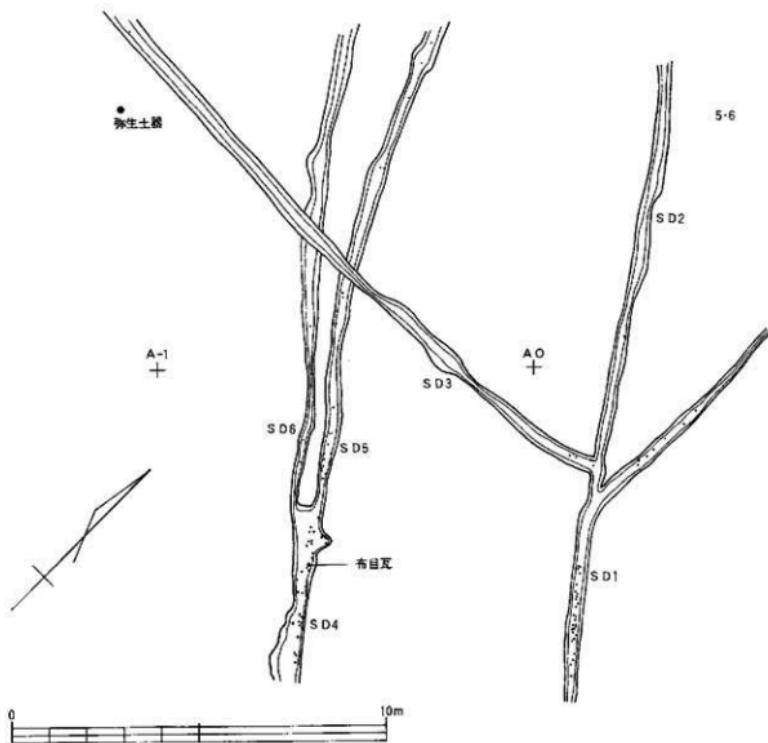


図21 水田部下層遺構

水田部 [図21]

調査区南部の長沢川が流れる谷平地部は大半が水田として開発されている。この水田部下層にも遺物包含層が延びているため調査した。その結果、水田耕作に伴う2時期の溝が検出された。溝内からは7世紀後半期の須恵器とともに近世陶器を出土しており、丘陵上の宅地跡と同時期に水田開発があったことを示しているのかもしれない。他に注目すべきは、かなり磨滅した弥生土器の甕か壺の底部片と、硬質頁岩製の石製品〔図25の55〕が各1点出土している。さらに、8世紀初頭の須恵器の坏窯と高台付灰、布目瓦が出土している。これらの遺物は水田直下（第3層上）から出土しており、直接遺構と関連するものではないが、周辺に弥生時代の遺構が存在する可能性を示唆するものとして今後の調査に期待したい。また、8世紀代の須恵器・瓦の出土は、山ノ神窯での製造と直接結びつかないため、その評価は困難である。ついでながら、水田部の谷奥上方には、旧長沢川の氾濫跡とそれを治水するための堤防跡がある。堤防中には、前述したとおり、多くの須恵器片が含まれており、山ノ神1号窯、2号窯にかかる十取場より持ち運ばれたものと考えられる。

IV. 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は整理箱で約48箱である。そのうち、表採を含む表土中の遺物8箱、丘陵斜面の再堆積層を中心とした包含層36箱、土壌3を中心とした遺構から4箱の出土をみた。これらの遺物のなかで、遺存度の良好なものは、土壌3と丘陵斜面据部からのもののが多かった。遺物の大半は、7世紀後半の山ノ神窯で生産された須恵器であるが、特筆すべきものとして、同時期の工房で使用したと考えられる陶製当具がある。その他、形状不明の陶製形代、鉄製品、石器7点、弥生上器1点、石製品1点、8世紀代の須恵器、布目瓦、近世陶磁器、寛永通宝2点などがある。

須恵器 [図22~24]

蓋(1~17) 内面にかえりがつくもの(1~15)と、かえりがつかないもの(16~17)

が出土した。内面にかえりがつくものは原則として宝珠つまみを有し、天井部は回転ナデで仕上げる。かえりは、口縁端部より下方へ突出するものと、突出しないものがあるが、後者が大半を占める。口径によって分類するならば11.5cm前後、14cm前後、16.5cm前後の3タイプに分けられる。7世紀の第3~4四半世紀に属する。

かえりのつかないものは、やや内傾気味に垂下する口縁端部と偏平なつまみを有する。天井部は回転ヘラケズリ、内面は回転ナデで仕上げる。8世紀の第1四半世紀に属する。

环(18~15) 高台のないもの(18~49)と、高台の付くもの(50~51)に大別できる。

高台のないものはさらに、その形態により、A底部が丸味をおび、体部が内溝して立ち上がるもの、B底部はやや丸味をおび、体部が外反して開くもの、C底部は平担で、体部が直線的に外上方に開くものに分けられる。Cはさらに口径により、11cm前後、14cm前後15cm以上に分けられる。すべて7世紀の第3~4四半世紀に属する。

高台のつくものは、高台の形態から断面方形の高台が短くつくもの(50)と外下方に開き気味につくもの(51)があるが、いずれも8世紀前半に属すると思われる。

皿(52) 口縁部は外反し、端部内面に凹線をめぐらす。底部外面は回転ヘラケズリ、他は回転ナデで仕上げる。

高坏(53~56) 脚付皿と形容してもいいが広義の高坏として分類する。皿部の体部は外反気味に外上方へ開く。

底部外面は回転ヘラケズリ、他は回転ナデで仕上げる。脚部は、ハ字形に開き、端部は外方へく字形に曲げる。平瓶(57) 口縁部から頸部にかけてのみ残存する。口縁部近くに2条の凹線を刻らせる。口縁端部は両をなす。長颈壺(58~61) 頸部には2条1対、もしくは1条のみの凹線を上下に施す。口縁部は外方へ大きく開く。体部は肩部と胴部の屈曲部直下に波状文を描き、その上下に凹線を刻らせる。胴部下半にはカキ目を施す。高台はハ字形に外わんしてつく。

鉢(62) 体部は直線的に外上方へ開く。口縁部は内傾した面をなし、端部をややつまみだす。体部外面は全面カキ目を施し、中央に2条の凹線を施す。

短颈壺(62~65) 小型で張り出した肩をもつもの(63)と、中型で丸味を帯びた体部に全面カキ目を施すものがある。

甕(66~70) 口縁部の形態より、丸く終るもの(66)、端部は面をなしており、口縁部外周に断面三角の凸帯を廻らせるもの(67~68~70)、端部は面をなしており、内外にやや肥厚するもの(69)がある。体部外面肩部はタタキのうえからカキ目を施す。タタキ目の形状は(68~70)は平行タタキ目(69)は格子タタキ目で、口縁部の形態と対応している。

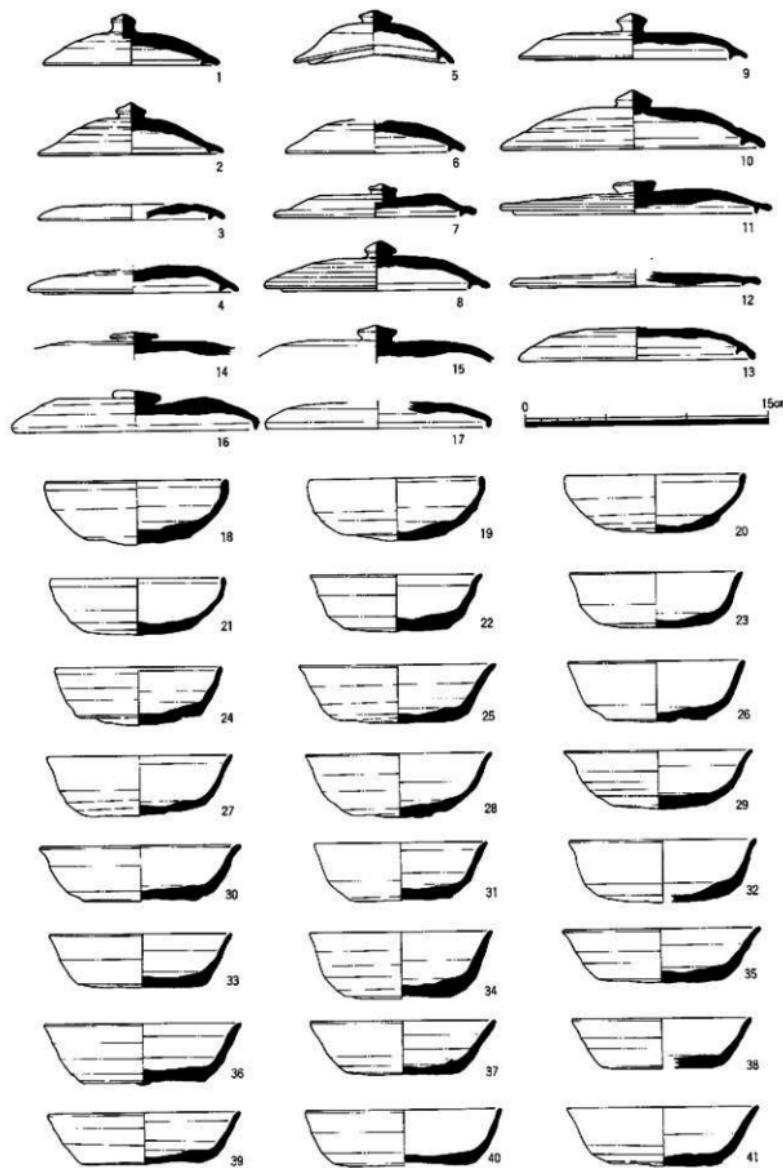


図22 遺物実測図(1)

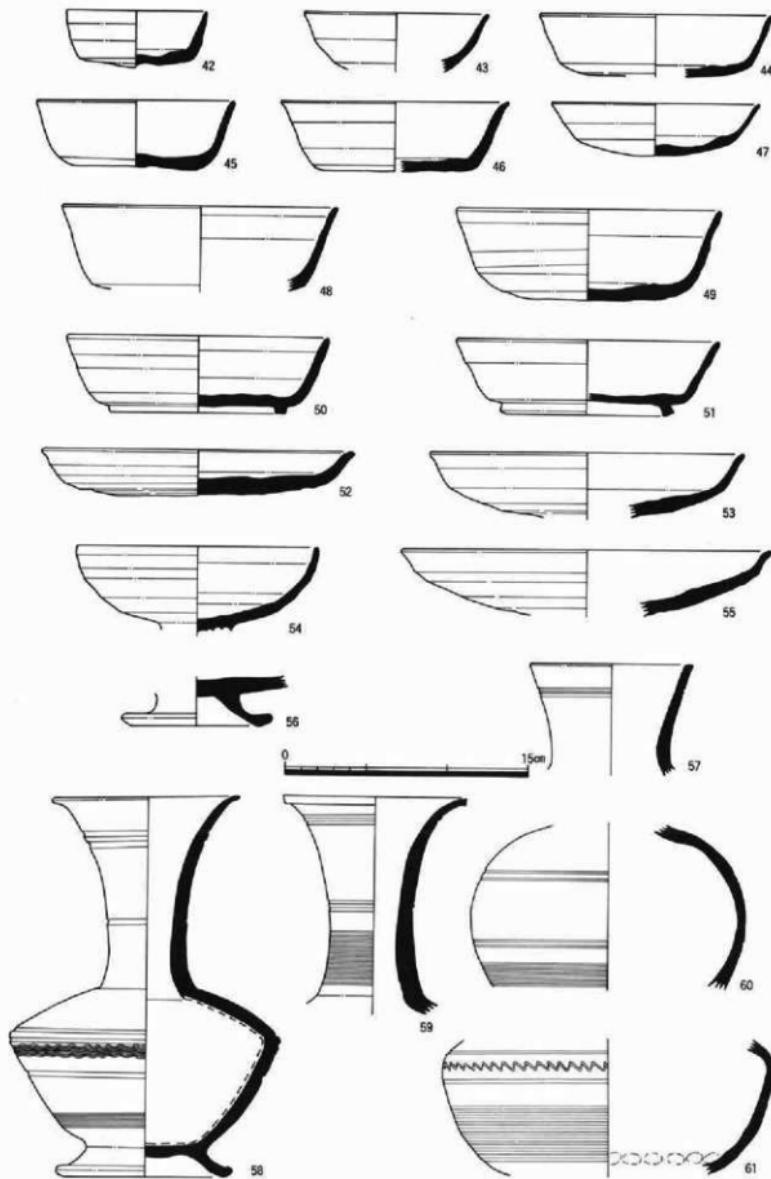


图23 遗物实测图(2)

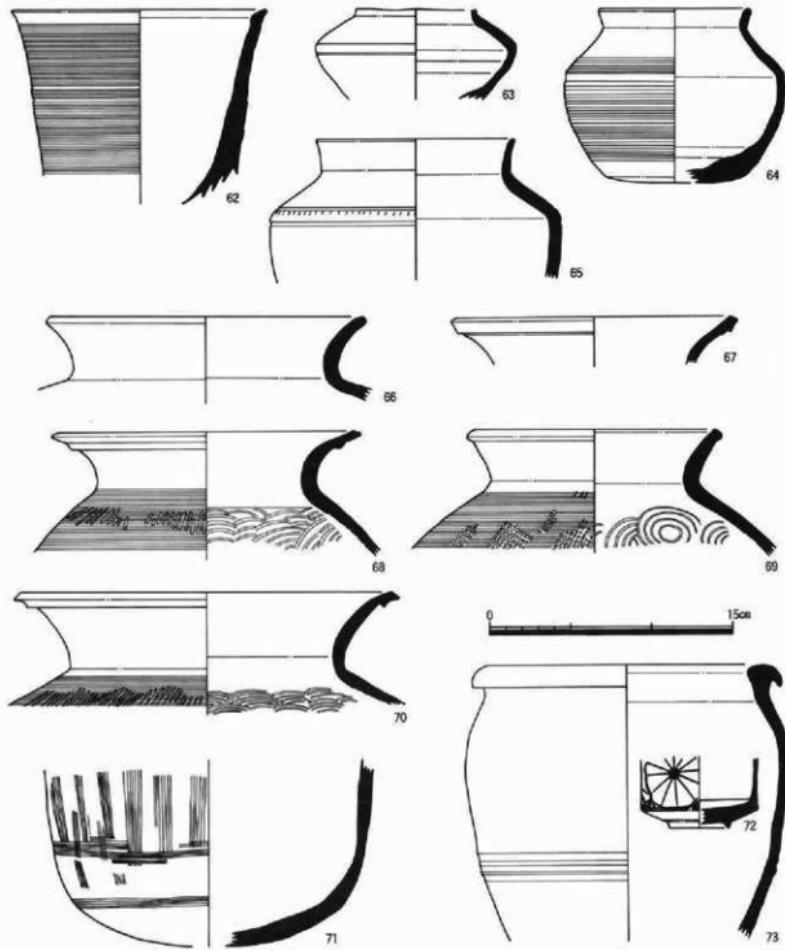


图24 遗物実測図(3)

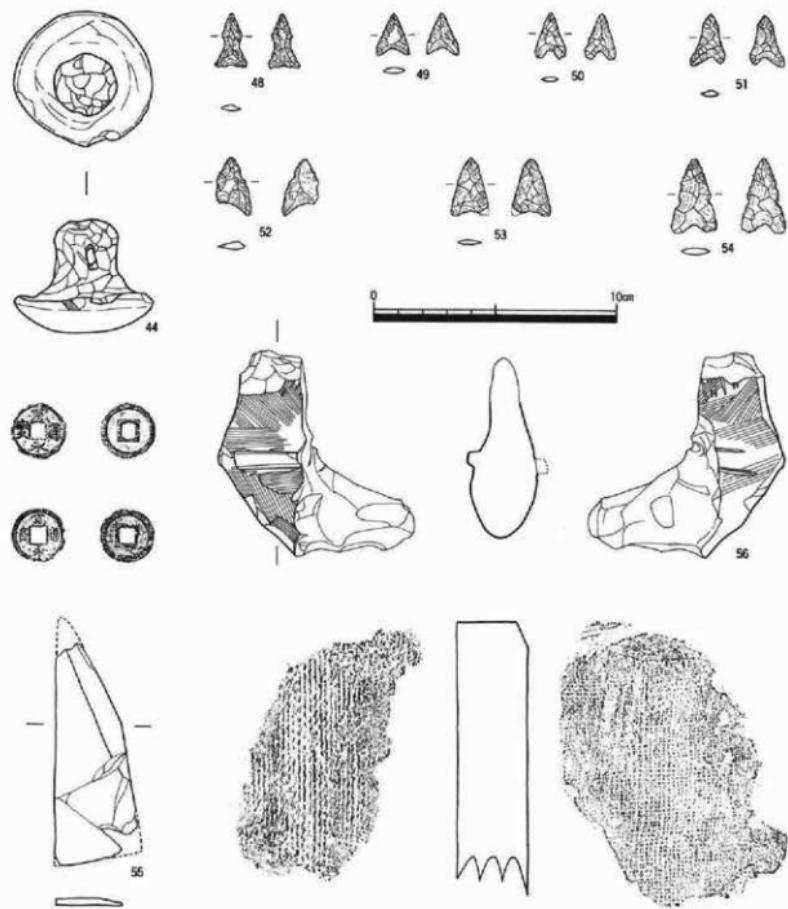


図25 遺物実測図(4)

当具 [図25・図版三十一の44]

きのこ形をした須恵質の当具である。全長4.6cm、笠にあたる部分の直径5.6cm、握り部の長さ3.2cm、握り部の紐直径2.8cmを計る。器面に当たる部分は無文で、使用による磨滅はみられない。握り部には、棒状工具によって紐を通すための穴が穿たれている。

形代 [図25・図版三十二の56]

破片のため、全体の形状は不明である。全面に細かいハケ目を施こし、両面に断面方形のタガを貼り付ける。一部にヘラ状工具による沈線が平行して数条みられる。残存長は9.8cm、厚さ2.8cmを計る。陶製馬の可能性がある。

布目瓦 [図25]

厚さ2.9cm、残存長12.4cmの平瓦である。凸面は織目タタキ、凹面は布目がつく。凹面の端部は削れる。

近世陶磁器 [図24の72・73]

(72) は湯呑茶碗で、灰白色の釉に青色で12弁の菊花文を描く。(73) は味そ臺で、口縁端部を大きく外下方へ折り曲げる。内外面ともに茶褐色の釉を施す。

寛永通宝 [図25]

直径2.3cm、透し孔は1辺0.6cmの方形を呈する。

弥生土器

円化し得なかつたが、壺か壺の底部破片である。胎土は粗く、2mm前後の砂粒を多く含む。時期決定は困難であるが、中期と考えている。

石製品 [図25・図版三十一の55]

ナイフ型の石製品で、硬質直刃製とみられる。復元長は9.8cm、厚さ0.2cmを計る。刃部は鋭るが、銳利ではなく、実用には耐えられない。

鉄製品 [図版三十一の47]

土壤3より出土した。全長18cmの釘である断面は長方形で0.4×0.3cmを計る。

石鎌 [図25・図版三十一の48~54]

調査区全域より7点出土した。すべてサメカイト製で、無基式である。刃部両辺中央に凹みをもうけるもの(48・54)と三角形のもの(49~53)がある。

フイゴ羽口 [図版三十二の57~60]

4点の破片が出土した。いずれも小片で、全体の形状は復元できない。各片は高温のため赤化し、一部に落着物がみられる。

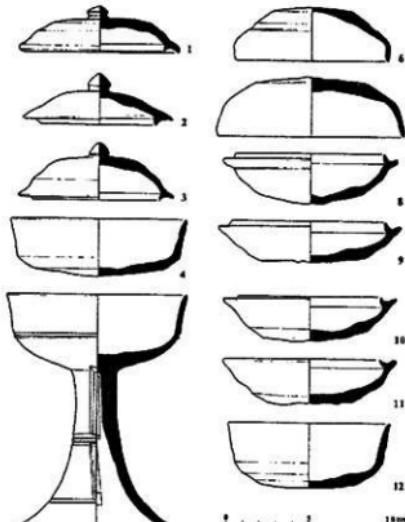
V.まとめ

すでに、位置と環境で記したように、山ノ神遺跡をはじめとする須恵器・製鉄遺跡群が存在する瀬田丘陵は、^①「湖南における一大工業地帯」として位置付けられる。この章では、山ノ神遺跡の操業時期・規模・製品の検討をもってまとめてみたい。

山ノ神遺跡の操業時期：大津市教育委員会の調査報告では、2基の窯のうち、第1号窯は飛鳥Ⅲ～V、第2号窯は飛鳥Ⅰ～IVの範囲に比定している。陶邑においては田辺編年のTK217, 46, 48、中村編年のⅢ型式に併行する時期としている。この見解については、今回の調査においても大きな変更を要しない。ところが、近江においては667年から672年にかけて大津宮遷都という一大国家事業があったため、山ノ神窯の操業年代の比定が、その成立背景の推定を大きく左右しかねない。つまりは、山ノ神遺跡を含む瀬田古窯址群が実年代で7世紀後半の中葉を契機に操業を開始しているならば、大津宮造営と密接な関係にある官營工房としての位置付けが可能である。一方、大津宮遷都を遡る7世紀中頃を操業開始とするならば、いわゆる地方窯の成立とみて、別な経営主体とその成立背景を考えなければならない。そこで、7世紀代の須恵器編年と実年代比定について、現時点での研究状況をみてみたい。実年代比定が可能な資料は大和飛鳥地方の寺院・宮址を中心とした消費地の調査成果と、それらへの須恵器を供給した生産遺跡の調査成果とに分かれる。このうち、前者の資料による編年がなされたのが『飛鳥・藤原宮発掘調査報告』^②での飛鳥Ⅰ～Vの五時期の設定である。(西1978、その後西1982、1983にて改編・追補)それによると、飛鳥Ⅰは小塙田宮推定地の溝S D050出土十器を標式資料とする。蓋にかえりのつく杯Gが出現するが、大半は6世紀末の蓋杯(杯H)である。つまみは乳頭状もしくは宝珠形を呈する。飛鳥Ⅱは坂田寺跡の池S G100出土土器を標式資料とする。杯Gと杯Hは相半ばの数量となる。飛鳥Ⅲは大阪府陶邑古窯址群TK217号窯出土上器を標式資料とする。高台付杯(杯B)が増加する。飛鳥Ⅳは雷丘東方遺跡の溝S D110や上ノ井手遺跡の溝S D015出土土器を標式資料とする。杯Gはほとんど姿を消し、かわって口径12～13cmの杯AⅣが成立する。杯Bにおいては、底部外面をヘラケズリしたもののかなりの割合で含んでおり(38名)、また蓋においても、かえりをもつものと、もたないものとが相半ばする。飛鳥Ⅴは藤原宮S D105や平城宮S D1900A出土土器を標式資料とする。杯Gは完全に姿を消し、杯AⅣと杯Bが人半を占める。杯Bにおいては蓋のかえりをもつ形式は完全になくなっている。(西1978)によると、飛鳥Ⅰは7世紀第1四半世紀、飛鳥Ⅱは第2四半世紀、飛鳥Ⅲを第3四半世紀、飛鳥Ⅳを第4四半世紀、飛鳥Ⅴを7世紀末から8世紀初頭としている。この編年は、その適応する地域を畿内とその周辺部を中心と仮定するが、大筋で学界の承認を得ていると言ってよい。ところが、実年代比定に関しては(白石1982)に代表される異論がある。白石氏は、瓦の製作年代の年代幅について、軒瓦の范型が相当長期間にわたって保存・使用されていることを指摘し、轟枝窯を代表とする瓦陶兼業窯の実年代比定に疑問を提起されている。つまり、轟枝窯の10要素窯の蓮華文軒丸瓦(a類)は飛鳥寺創建瓦より型式的に何段階か後出するものであり、豊浦寺系瓦の有腹素弁蓮華文軒丸瓦(c類)についても、舒明天皇頃に創建されたと推定される豊浦寺に実年代を求め、從来7世紀初頭ないし第1四半世紀とされてきた轟枝窯を、^③7世紀第2四半世紀とするというものである。さらに、前期難波宮整地層ならびにその下層出土土器のあり方から、7世紀中葉には内面にかえりのつくつまみ付の杯蓋が出現してはいたが、消費地では、6世紀以来の杯蓋が多量に用いられていた、とする。7世紀後半期の実年代比定は西氏のものとはば一致するので省略するが、山ノ神窯の実年代を示すものとして、大津市穴太遺跡の瓦窯を大津京時代(667～672年)に比定していることが注目される。このように西氏と白石氏とでは、内面にかえりのつくつまみ付蓋の出現期で約半世紀近くの差が認められ、飛鳥Ⅱの実年代比定についても、西氏が7世紀第2四半世紀とするのにたいし、白石氏は640～660年頃を考えておられる。こうした年代比定のズレは文献史料の扱い方と、瓦の型式に付与する実年代の差から生じたと思われる。この差

を埋める可能性のある資料として、宇治市隼上り窯がある。隼上り窯では、3基の瓦陶兼業窯が発掘調査され、豊浦寺創建にかかる瓦窯であることが判明した。3基の窯は須恵器も焼成しており、調査者の杉本氏はこれを4段階に編年した。このうち、第1段階は7世紀前後、第3・4段階は7世紀第2四半世紀の年代が与えられている。さらに、軒丸瓦D型式とした素舟8弁蓮華文軒丸瓦が幡枝窯のC類と同范関係にあることが判明しており、報告書では前後関係不明としながらも、隼上り窯から幡枝窯へ范が移動したとする指摘がある。軒丸瓦D型式は須恵器編年の中第1段階と第2段階の間に焼成されており、幡枝窯は隼上り窯の第2段階以降に平行する可能性が強い。こうした隼上り窯での成果を基軸に、法隆寺下層、楠葉平野山窯などの新見知を加えて7世紀前半期の須恵器編年に絶対年代を与えるとした仕事（菱田1986）もみられる。菱田氏は本論である初期瓦生産と工人の動向について論究する前提作業として7世紀前半期の須恵器編年に実年代を付与しており、西氏と同様の結果を導びいている。

以上の研究動向の中で、山ノ神遺跡の操業開始時期との接点をもつ資料は、やはり前期難波宮整地層ならびにその下層川土土器であろう。前期難波宮が孝徳朝の長柄豐造宮であり、その完成は白雉三年（652年）であることは、現在までの発掘調査の結果、有力となってきた。ここで土器様相は、整地層直下のSK10043出土土器では蓋につまみを有し、内面にかえりをもつものはなく、すべて從来の杯である。整地層内にはかえりをもつ杯蓋が出現しているが、大半は從来の杯である。これらの上器は、あくまで消費地での様相であり、生産地での資料とは一致しないことがあるかもしれない。あえて対比させるならば、先述した隼上り窯での第3～4段階と型式的には一致する。しかし、隼上り窯第4段階ではかえりをもつ杯蓋と杯身が過半を占めており、前期難波宮整地層での組成よりも新しい傾向を示している。前期難波宮整地層が、長柄豐造宮の造営によるものとするならば、



第26回 前期難波宮出土須恵器
 (1. 朝堂院東回廊柱據形出土, 2~9. 整地層出土,
 10~12. 整地層直下灰色粘土層出土)

その実年代の下限は、645年から652年に限定できる。したがって、より良好な一括資料として牛座遺跡では、隼上り窯第4段階や、陶邑T G 68号窯の実年代の下限を7世紀中頃としてよいであろう。さらに、前期難波宮で注目されるのは、第四十次調査において朝堂院東回廊址の掘立柱掘形埋土中より、〔図26の1〕の須恵器杯蓋が出土している。この須恵器の年代が直ちに前期難波宮の造営時期を決定するものではなく上限を両するにすぎないとしながらも、整地や造営時期と矛盾しない点を評価している。つまり、7世紀中頃でもより新しい段階の須恵器である。この須恵器杯蓋は一点のみであるので、これをもって一型式の実年代を決定することは不可能であるが、参考にはなるであろう。この資料と山ノ神遺跡の中でも最も古い段階と考えられる杯蓋〔図27の82〕を比較してみると、前者の口径が約10cm、後者の口径12cmで、山ノ神遺跡例の方が法量の拡大傾向がうかがわれる。一方、つまみやかえりの形状についてはほとんど差はない、同一型式の範囲内と認められる。したがって、山ノ神遺跡での焼成業開始は、7世紀中頃から型式変化をもたらすだけの時期差がない時点のことと推定される。次に、最終操業時期については、第1号窯最終床面上の須恵器群がその年代を示している。そのうちの1つである図の4は、扁平なつまみを有し、かえりは短く退化している。藤原宮大溝S D 1961-Aは、宮造営のために設けられた運河と考えられているもので、その中から検出された土器群は、天武末年頃と推定される大溝の開削から大極殿の造営に伴う整地工事によって埋没するまでの短期間の中に投棄されたものとされている。これらには、扁平なつまみを有し、かえりは短く退化したものと、かえりの消失した直後のものとが共存している。この実年代を685～694年頃と考えるならば、山ノ神遺跡では、窓内よりかえりの消失した段階の杯蓋を検出していないので、藤原宮S D 1961-Aの直前に比定できよう。そこで、推論の域を出ないが、山ノ神遺跡の須恵器焼成業期間は、大津宮遷都(667年)に先立つ造営期間のある時期に開始された可能性が最も高く、その操業終了は、680年を前後する時期と考える。なお、大津市の報告にある第2号窯の飛鳥II～IVという時期比定の根拠は報告書図版四十二の79の須恵器杯蓋等のかえりが口縁端部より垂下しているためと思われる。しかし、出土遺物を群として捉えた場合、その大半はより新しい様相を示している。飛鳥IIでは前述したとおり古墳時代以来の杯が半数を占める状況であるが、山ノ神遺跡では、古墳時代以来の杯は數點しか出土していない。これは、生産遺跡での先進性を考慮したとしても、飛鳥IIに後づる型式であるとすべきであろう。

山ノ神遺跡の規模：今までに判明しているのは2基のみであるが、約100m南の地点でも窓跡らしき焼上及び灰層、土器満リ等を検出している。また、近接する月輪南流遺跡、茶屋前遺跡、天神山遺跡等、詳細は不明であるが、ほぼ同時期の須恵器窯が散在しており、瀬田古窯址群・里山支群とも称すべき須恵器生産地を形成している。さらに北に位置する同時期の笠山古窯址を含めると、瀬田丘陵の大半で須恵器生産が行なわれていたことがわかる。この状況は7世紀後半より始まり、木瓜池古窯址群に代表されるように8世紀代まで継続する。ここで注目されるのは、位置と環境で述べたように、瀬田丘陵では須恵器生産とともに鉄牛産をも行なっていることである。このような、重要な生産工房が律令制国家成立期から完成期にかけて出現し、経営されることに瀬田丘陵生産遺跡群の政治的性格が如実に表われているといえよう。

山ノ神遺跡の製品（図27）：本窯で生産された須恵器は同時期の陶邑古窯址群のそれとほとんど同一種類の器形を備えている。具体的には、蓋杯・皿・高杯(盤)・枕・鉢・平瓶・長颈壺・短頸壺・鉄鉢形土器・甕・瓶・円面鏡・鉈・陶局・土重・陶棺などがある。このうち、山ノ神遺跡の製品の供給先を考えるうえで見逃せないものが円面鏡である。7世紀後半期において文字を使用する場所としては、官衙か寺院に限定されると考えて大過ないであろう。山ノ神遺跡が先の推定どおり大津宮遷都にかかわって操業を開始した官営工房と考えるならば、この円面鏡の供給先は当然、大津宮と推定される。円面鏡は他の器種に比較して产地と消費地の同定がしやすいので、今後の大津宮の調査に期待したい。もう一つ、特徴のある遺物として陶棺がある。近年、瀬田丘陵各所の古

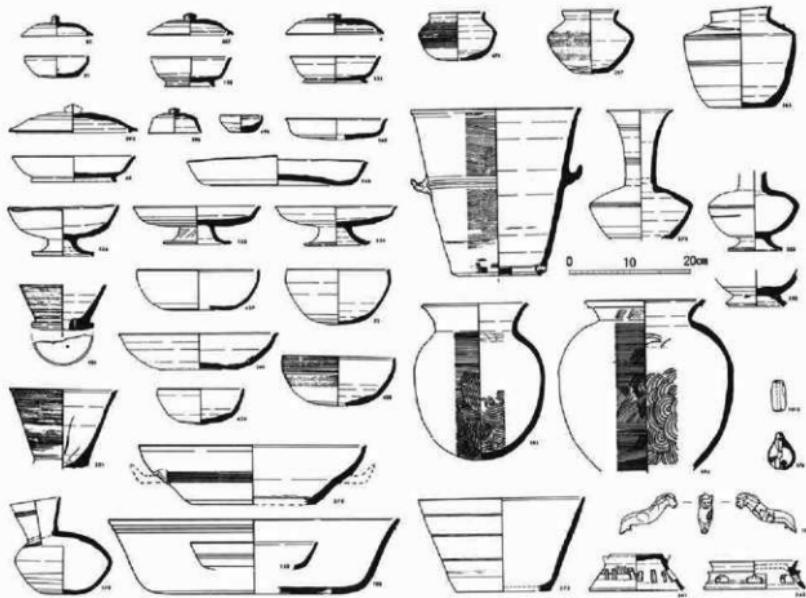


図27 山の神遺跡出土土器組成

墳より陶棺の出土が相次いだことは、須恵器工人と古墳の被葬者との関係を考えるうえで興味深い。類例を陶色でみてみると、光明池第234号窯（HM234）に陶工の名と考えられる記銘のある陶棺片が出土している他、母17号窯（TG17）、高藏寺第36-1号窯（TK36-1）から陶棺が出土している。KM234の陶棺に記された人名を検討された中村氏は、（中村1982）で渡来人系の陶工である可能性が強く、中村編年のⅡ型式からⅢ型式の変化は「陶邑を中心とする畿内の須恵器生産は、技術者の多回的な渡来、参加によって器種、手法にみる型式的変遷を生じた」とされている。近江においても、齊明七年（661年）「百濟佐平福所献唐俘一百六口、居干近江国壁田」。天智四年（665年）「百濟百姓男女四百人、居干近江国神前部」。天智八年（669年）「又以佐平余自信・佐平鬼室集斯等・男女七百余入、遷居近江国蒲生郡」とあり、山ノ神遺跡をはじめとする瀬田古窯址群、栗東町御園古窯址群、旧蒲生郡の八日市市瓦屋寺古窯址群、布引山古窯址群などが当該期に操業を開始していることは注目に値しよう。このうち、瀬田古窯址群と布引山古窯址群が須恵器のみを生産しているのに対し、御園古窯址群と瓦屋寺古窯址群は瓦窯兼業窯として操業している。瓦陶兼業窯については、これらの資料を報告、分析した丸山氏によると「白鳳寺院の創建期における瓦の生産を基点として瓦生産にかかわった地元農民が瓦工人から土器作りを学んで操業を開始したものが多く一」としている。同じく、瓦陶兼業窯として地方窯が成立することが多いことを論究したものとして、田中氏は「新しい須恵器技術がその造瓦と結合した形で移植されていったことは、その技術を開発保持していた工房の編成維持にあたった中央の国家権力から造寺を発願した権力に対する技術者集団の委託あるいは派遣があった」とする。あるいは菱田氏の「瓦陶兼業の内容が須恵器工の動員によって恒常的

な瓦工房が形成されたことを示すのではなく、不安定で突出した性格を持つ瓦の需要に応えるために労働力を臨時に須恵器工人に依存した」としている。このように7世紀代における地方窯の成立に須恵器工人と瓦工が深くかかわっていると理解するのが学界の通説であろう。そうしたなかで、須恵器生産のみを行なっている山ノ神遺跡と八日市市布引山古窯址群の須恵器工人は、陶邑古窯址群とともにより中央権力に近いことが予想される。

この他、製品ではないが、出土例が少ない遺物として陶製当貝がある。出土例としては、岐阜市老洞古窯跡群^⑨や美濃須賀地区的ものが著名であるが、近年、振磨出合遺跡より山ノ神遺跡と同様に無文の陶製当貝が出土している。時期的にはかなり下るとのことであるが、須恵器製作技術解明のための貴重な資料となろう。

以上、簡単であるが山ノ神遺跡の性格付を行なった。推論が多く、今後の調査・研究に期すところは大きい。先ず諸氏の御批判を御願いしてまとめてかえたい。

- ①滋賀県教育委員会「国道1号線 京滋バイパス予定路線内遺跡分布調査概要報告書」昭和45年度
②須崎雪博『大津市埋蔵文化財調査報告書(9)山ノ神遺跡発掘調査報告書』昭和60年3月 大津市教育委員会
③西弘海「七世紀の土器の時期区分と型式変化」『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅰ』昭和53年2月 奈良国立文化財研究所/田辺昭三『須恵器大成』昭和56年7月/中村浩「奈良前期の須恵器生産」『日本書紀研究』第十二冊 昭和57年11月/白石太一郎「畿内における古墳の終末」『国立歴史民俗博物館研究報告』第1集 昭和57年6月/西弘海「土器様式の成立とその背景」小林行雄博士古稀記念論文集『考古学論考』昭和57年/西弘海「法隆寺出土の7世紀の土器」『法隆寺昭和資財帳調査秘宝展図録』一、1983年/菱田哲郎「畿内の初期瓦生産と工人の動向」『史林』69-3 1988年/
④奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査報告』1 昭和46年
⑤奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査報告』3 昭和48年
⑥田辺昭三『陶邑古窯址群』I 平安学園考古クラブ 昭和40年
⑦④と同じ
⑧⑥と同じ
⑨奈良県教育委員会『藤原宮』(奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第25回) 1969年
⑩奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告』1 1978年
⑪横山浩一・吉本亮俊「京都市幡枝の飛鳥時代・瓦陶兼業窯跡」『日本考古学協会 昭和38年大会研究発表要旨』1963年
⑫中尾芳治「難波宮造営前の遺跡調査」『難波宮址の研究』研究予察報告第5、第2部 1965年/中尾芳治「前期難波宮をめぐる諸問題」『考古学雑誌』第58卷第1号 1972年/藤田幸次「難波宮下層遺跡出土の土器について」『難波宮の研究』第7 1981年
⑬林博道・葛野泰樹「滋賀県大津市穴太遺跡の瓦窯跡」『考古学雑誌』第64卷第1号 1978年
⑭杉本宏『隼上り瓦窯跡発掘調査概報』(宇治市埋蔵文化財発掘調査概報第3集) 1983年 宇治市教育委員会
⑮田中暉「古代窯業の展開」『講座・日本技術の社会史 第四巻窯業』1984年
⑯法隆寺『法隆寺防災施設工事・発掘調査報告書』1985年
⑰西川敏秀「楠葉東遺跡内第五瓦窯」『枚方市文化財年報』1 1980年/八幡市教育委員会『平野山瓦窯跡発掘調査概報』1985年

- ◎菱田哲郎1986年（③と同じ）
- ◎◎同じ
- ◎◎同じ
- ◎大阪府教育委員会『南邑Ⅱ』（大阪文化財調査報告書第二九輯）昭和52年
- ◎大阪市教育委員会『昭和46年度（第39次・第40次）難波宮跡調査報告書』1972年
- ◎◎同じ（中尾1972）
- ◎◎同じ（中村1982）
- ◎◎同じ
- ◎◎同じ（中村1982）
- ◎丸山竜平「栗東町下戸山山田蛭子講南古窯址について」『滋賀文化財だより』№16 1978年
- ◎丸山竜平「八日市市瓦屋寺町所在瓦屋寺瓦陶兼業窯址群について」『滋賀文化財だより』№25 1979年
- ◎八日市市教育委員会「布引丘陵分布調査報告」『八日市市文化財調査報告(7) 昭和59年度埋蔵文化財調査報告書』
1986年／八日市市教育委員会『寺焼谷遺跡発掘調査現 地説明会資料』1986年
- ◎丸山竜平「律令制期の草津 第二節村落と生産」『草津市史』第1巻 昭和56年／丸山竜平「滋賀の古代窯」
『日本やきもの集成 6 近畿』1981年
- ◎◎同じ
- ◎◎同じ（菱田1986）
- ◎鎌木義昌・亀田修一「播磨出合遺跡について」『兵庫県の歴史』22 昭和61年／鎌木・亀田氏には同資料について御教授賜ったが本報告に生かすことができなかった。

山ノ神遺跡 上器一覧表

器 形	番 号	法 量 (cm)		残 存 度	出 土 地 点	国 版 番 号
		II 径	器 高			
蓋	1	11.0	3.2	完 品	SK 3	二十八-8
	2	11.4	3.3	完 品	SK 3	二十八-1
	3	10.1	—	口縁 $\frac{1}{4}$		
	4	13.1	—	口縁 $\frac{3}{4}$		
	5	9.9	2.8	%	1号窯灰原	二十八-2
	6	11.0	—	つまみのみ欠損	SK 3	二十八-4
	7	12.6	2.1	口縁 %	SK 3	二十八-7
	8	14.0	3.1	口縁 %	SK 3	二十八-6
	9	14.1	2.9	口縁 %	B 1	二十八-10
	10	16.4	3.2	完 品	B 1	二十八-5
	11	16.9	2.1	完 品	B 1	二十八-3
	12	15.5	—	口縁 %		
	13	14.7	2.1	口縁 %	B 1	二十八-9
	14	—	—	口縁部欠損	A 0	
	15	—	—	✓	SD 1	
	16	15.4	2.6	完 形	水田部	三 十-33
	17	13.9	—	口縁 %		
坏	18	11.3	4.1	口縁 %	B 1	二十九-27
	19	11.0	3.9	口縁 %	SK 3	二十九-20
	20	11.3	3.5	口縁 %	SK 3	二十九-26
	21	10.8	3.5	口縁 %	A 0	
	22	10.6	3.6	口縁 $\frac{1}{4}$	B 1	
	23	10.7	3.5	口縁 %	A 8	
	24	10.3	3.7	口縁 %	SD 1	二十九-21
	25	12.2	3.7	口縁 %	SK 3	二十九-18
	26	12.2	3.8	口縁 %	SK 3	二十九-30
	27	11.5	3.8	口縁 %		二十八-12
	28	11.6	3.9	口縁 %		二十九-28
	29	11.6	3.7	口縁 %		三 十-38
	30	12.5	3.5	口縁 %		二十八-15
	31	10.7	3.6	口縁 %	SK 3	二十九-25
	32	11.6	3.9	口縁 %	SK 3	
	33	11.4	3.4	口縁端部欠損	B 1	二十八-13
	34	11.3	4.2	口縁一部欠損	SK 3	二十九-22
	35	12.4	3.3	口縁 %	B 1	
	36	12.2	3.8	口縁 $\frac{1}{4}$	SK 3	二十九-17
	37	11.5	3.4	完 品	B 1	二十九-24
	38	11.1	3.1	口縁 $\frac{1}{4}$	SD 1	

器 形	番 号	法 量 (cm)		残 存 度	出 土 地 点	図 版 番 号
		IJ 径	器 高			
坏	39	12.0	3.2	口縁 有	B 9	二十九-29
	40	12.2	3.5	口縁 有		
	41	11.9	3.7	完 品	B 1	二十九-23
	42	8.7	3.6	口縁一部欠損	1号窯灰原	二十八-11
	43	11.5	—	口縁 有	S K 3	
	44	14.4	—	IJ縁 有	B 0	
	45	12.4	4.1	口縁 有	S K 3	二十八-14
	46	14.1	4.3	口縁 有	C 1	二十八-16
	47	12.9	3.3	口縁 有	S K 3	
	48	17.0	—	口縁 有	S K 3	
	49	15.5	5.7	完 品	S K 3	二十九-18
高台付坏	50	16.3	4.8	口縁 有	水田部	三十 -34
	51	16.4	4.7	口縁 有	水田部	
皿	52	19.4	3.0	完 品	S K 3	三十 -39
高 坏	53	19.6	—	口縁 有	C 1	
	54	14.8	—	口縁 有	A 0	三十 -31
	55	22.9	—	口縁 有	S K 3	
	(8.0)			高台のみ	S B 1	三十 -32
平 瓶	57	10.2	—	口縁 有	S K 3	
長 頸 壺	58	11.7	23.5	完 品	B 1	二十一-46
	59	11.4	—	口縁・頸部	B 9	三十一-45
	60	—	—	体部 有	S K 3	
	61	—	—	体部 有		
鉢	62	15.8	—	口縁 有	B 9	
短 頸 壺	63	7.5	—	IJ縁 有		三十 -41
	64	9.5	10.8	口縁 有	S K 3	三十 -40
	65	12.3	—	口縁 有	S D 1	三十 -35
壺	66	19.6	—	口縁 有	B 1	三十 -42
	67	17.8	—	口縁 有	S K 3	
	68	19.4	—	口縁 有	堤防部	三十 -36
	69	15.6	—	口縁 有	*	三十 -43
	70	22.9	—	IJ縁 有	B 1	三十 -37
	71	—	—	底部・体部 有	S K 3	
近世陶磁	72	—	—	底部 有	D 1	
	73	19.2	—	口縁 有	B 1	

図 版

図版一 山ノ神遺跡航空写真





丘陵南斜面（南から）調査前



丘陵下（丘陵上から）調査前



丘陵裙部 試掘状況



丘陵南斜面 東半部掘削状況



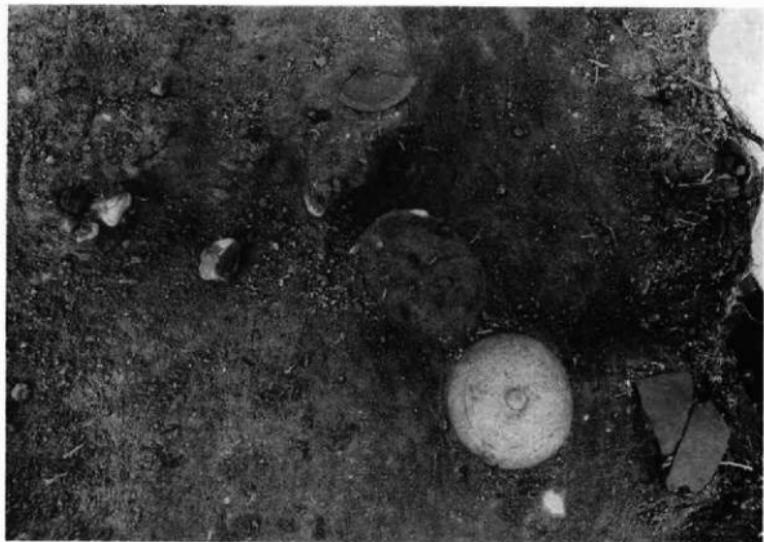
丘陵上 近世屋敷跡（北から）



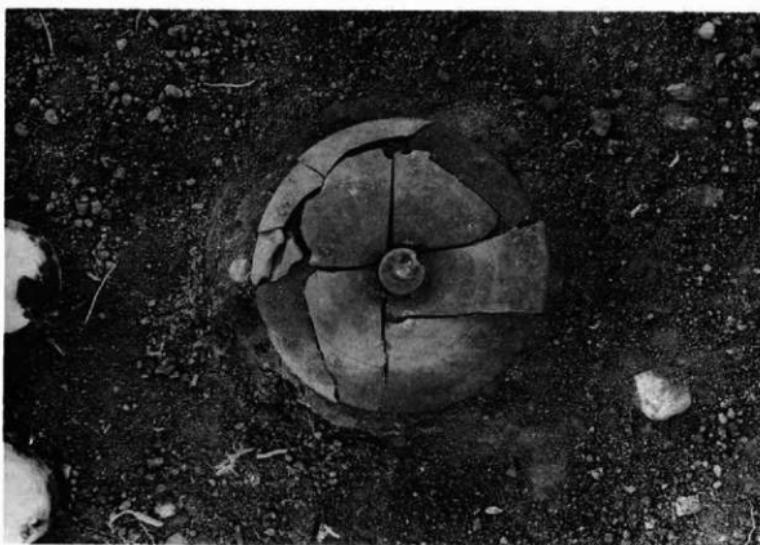
丘陵上 近世屋敷跡（西から）



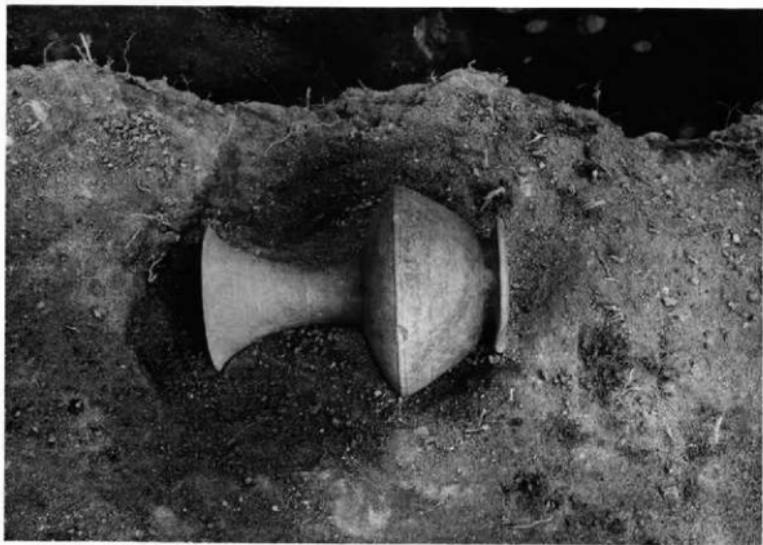
丘陵裾部 遺物出土状況（丘陵上から）



丘陵裾部 遺物出土状況（その一）



丘陵部 遺物出土状況（その二）



丘陵部 遺物出土状況（その三）



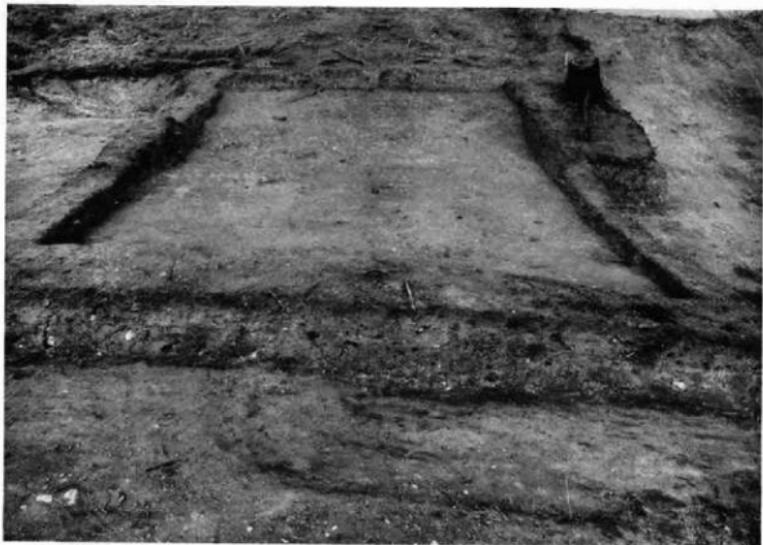
丘陵南斜面 遺物出土状況（その四）



丘陵裾部 遺物出土状況（その五）



丘陵南斜面 地区割状況（南から）



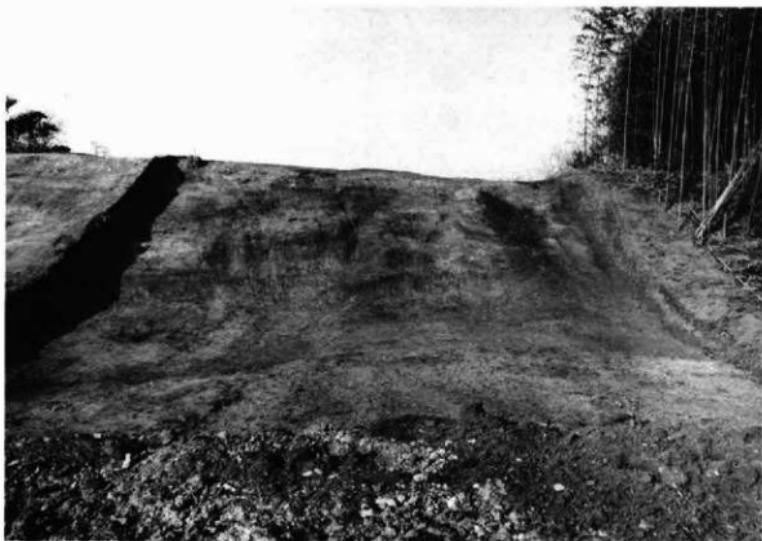
丘陵据部 土層堆積状況（南から）



丘陵南斜面B I～C I（丘陵上から）



丘陵南斜面B I～C I（南から）



丘陵南斜面C1～D1 完掘状況（南から）



丘陵南斜面A1～C1 完掘状況（南から）



丘陵南斜面中央 土層堆積状況（西から）



丘陵南斜面Aライン 土層堆積状況（西から）



丘陵南斜面Dライン 土層堆積状況（西から）



丘陵南斜面 調査区西端部 土層堆積状況



丘陵南斜面Aライン 土層堆積状況（東から）



丘陵標部Cライン 断面状況



丘陵上全景（南から）



丘陵上全景（東から）



丘陵上部分（東から）



丘陵上北半部（東から）



丘陵上80m ライン 土層堆積状況（北から）



丘陵上B ライン 土層堆積状況（西から）



丘陵上 遺構全景（北より）



丘陵上 掘立柱建物(SB1)と土壙(SK3)



土壤(SK3) 遺物出土状況



土壤(SK3) 遺物出土状況(部分)



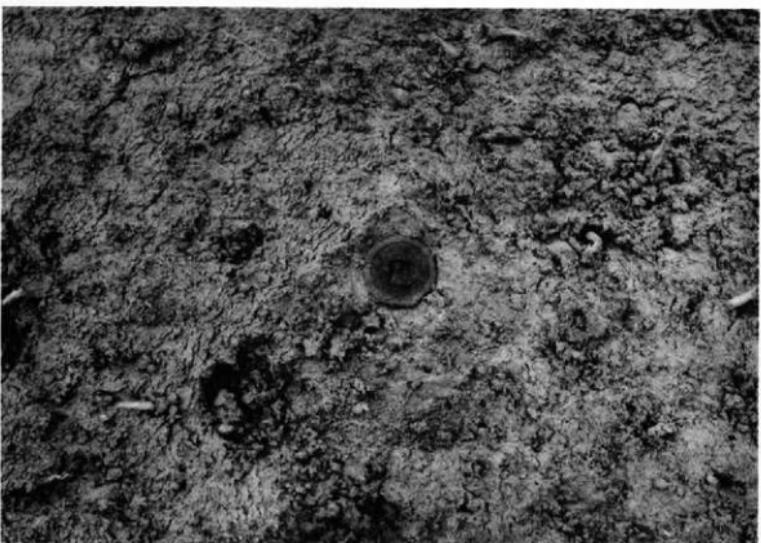
土壤(S K 3)底部 遺物出土状況(北から)



土壤(S K 3)底部 遺物出土状況(西から)



当具出土状况



宽永通宝出土状况



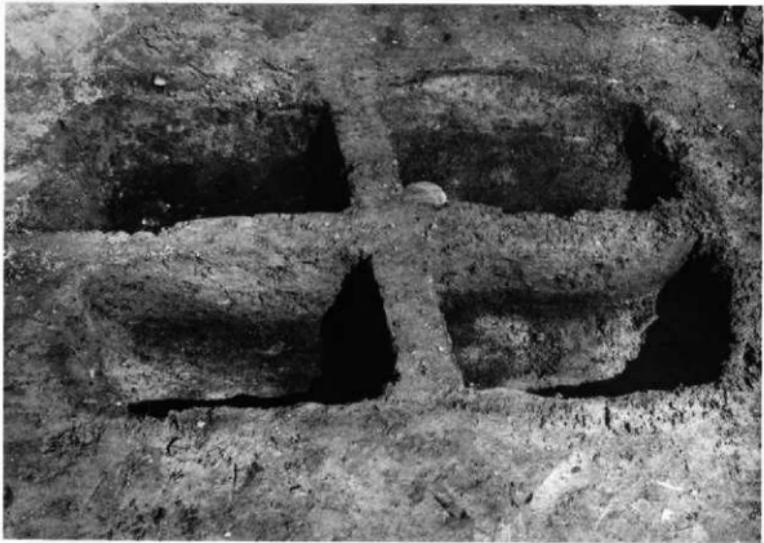
陶製馬出土狀況



石鑊出土狀況



土壤(SK4) 検出状況



土壤(SK4)内 土層堆積状況



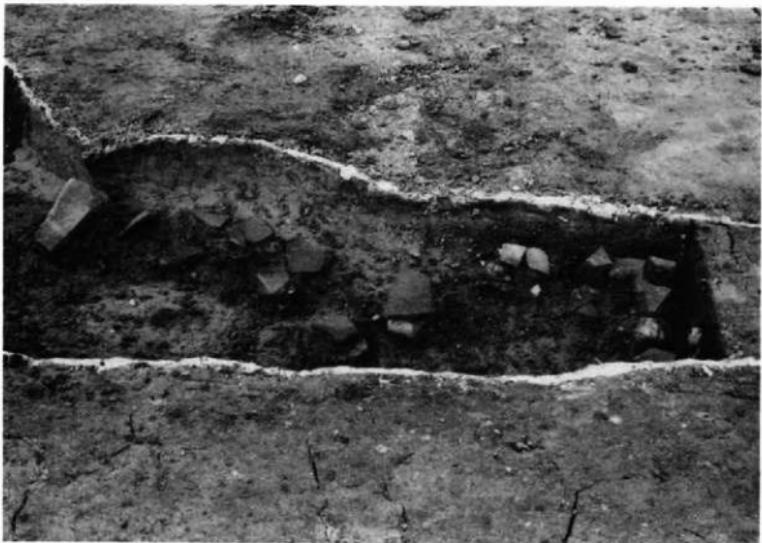
水田部 下層造構（南から）



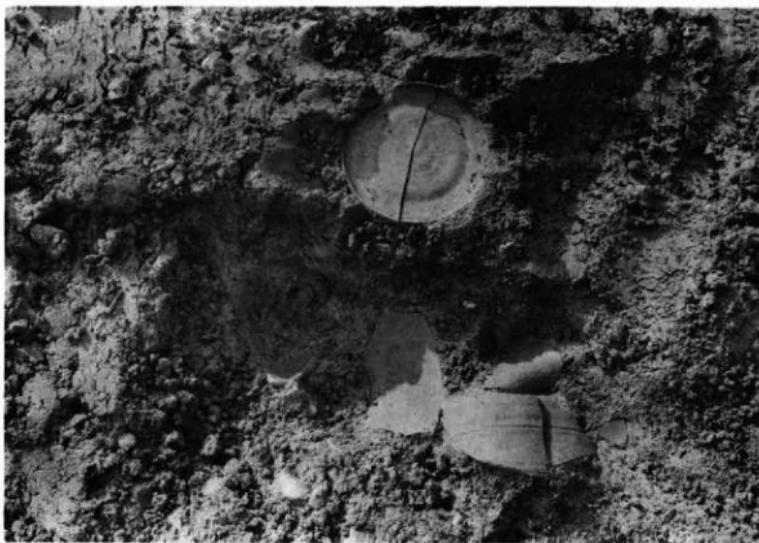
水田部 下層造構（北から）



溝內遺物出土狀況



溝內遺物出土狀況



水田部 須恵器(8C)出土状況



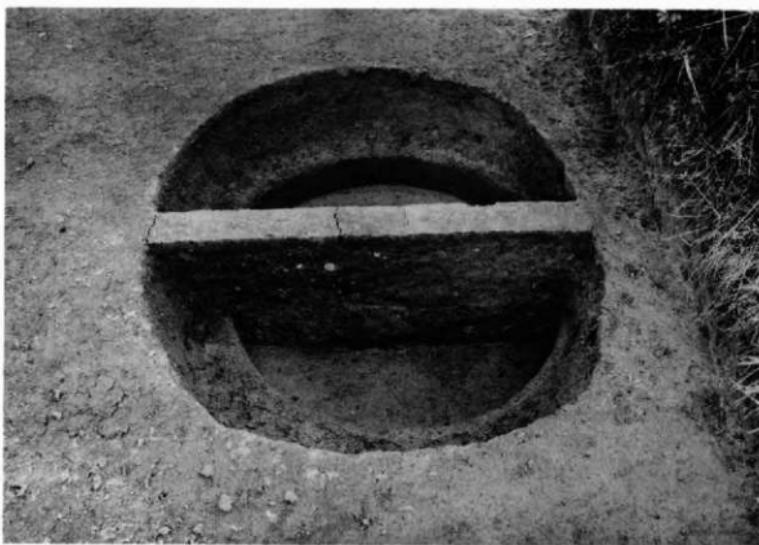
水田部 弥生土器出土状況



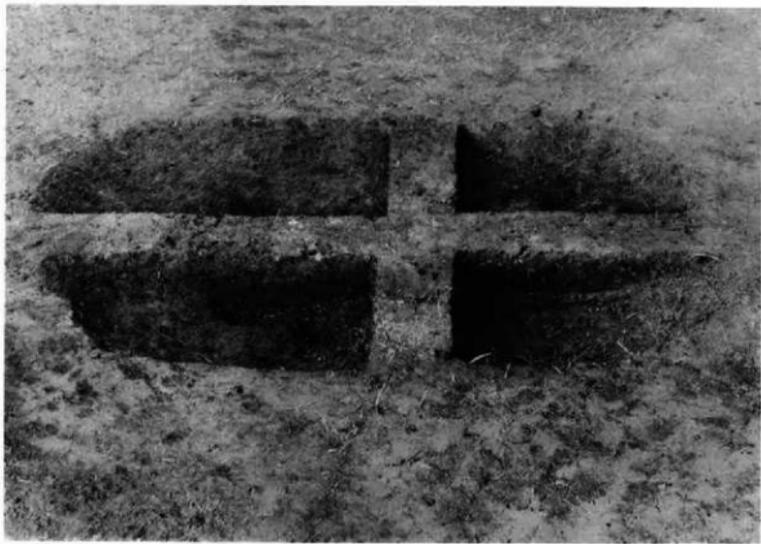
石拾遺跡 土層堆積狀況



石拾遺跡 土層堆積狀況



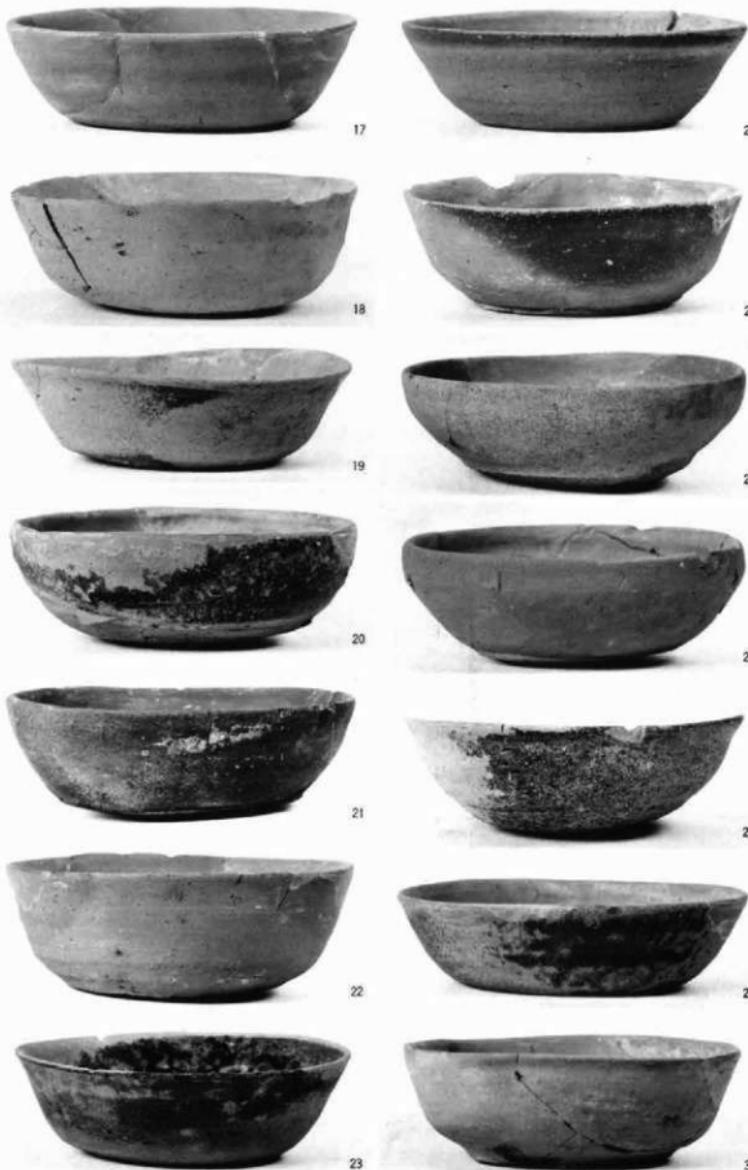
石拾遺跡 野井戸



石拾遺跡 土壙



出土遺物

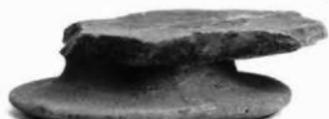




31



38



32



39



33



40



35



41



36



42



37



43





55



56



57



58



59



60

昭和61年11月20日

山ノ神遺跡発掘調査報告

国道1号京滋バイパス関連遺跡発掘調査報告

編集 滋賀県教育委員会

発行 滋賀県教育委員会

財団法人 滋賀県文化財保護協会

印刷 有限会社 真陽社

京都市下京区油小路仏光寺上ル

TEL (075) 351-6034